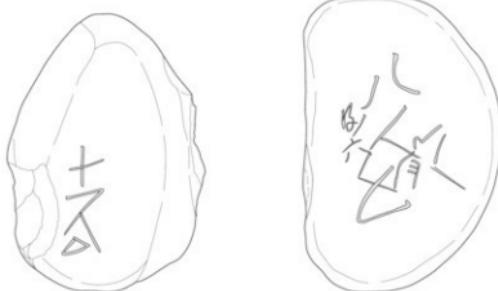


前橋城（三の丸門東地点）

－旧中央公民館解体工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



再築前橋城三の丸外堀跡石垣出土 積石墨書

2011. 11
前橋市教育委員会



前橋城（三の丸門東地点）全景 南西から



再築前橋城三の丸外堀跡（W-11号堀跡）全景 南西から



D-1

肥前 丸碗

5



W-10

肥前 くらわんか碗

53



表土

肥前 陶胎染付碗



近世整地刷

肥前(古九谷様式) 蓋物蓋

82



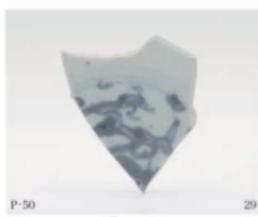
D-1

瀬戸・美濃 稚児茶碗



表土

九谷か 小环



P-50

明 皿

29



D-1

明 皿

(底曲)



P-85

肥前 吴器手碗

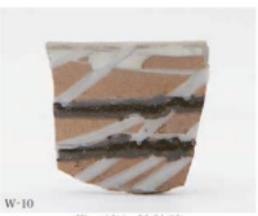
32



近世整地刷

肥前 京焼風陶器碗

86



W-10

萩 流し飴釉碗



W-10

京・信楽 小杉茶碗



D-2

京・信楽 色絵半球碗

10



W-3

京・信楽 小环

47



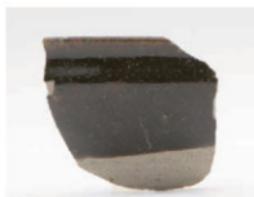
近世整地層
瀬戸・美濃 尾呂茶碗 83



P-10
瀬戸・美濃 長石釉碗



W-4
瀬戸・美濃 志野皿 48



W-2
瀬戸・美濃 天目茶碗 45



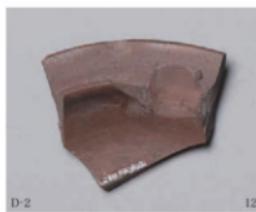
P-3
瀬戸・美濃 白天目茶碗 21



近世整地層
瀬戸・美濃 菊皿 85



P-29
瀬戸・美濃 鉢 (煙硝擂) 27



D-2
備前 煙火受付皿 12



W-10
志戸呂 煙火受付皿



W-1
堺 捜鉢 42

卷頭図版 4



中世陶器

は　じ　め　に

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、赤城山と榛名山の裾野をぬって南北に利根川が流れる、四季折々の風情に溢れる県都です。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋八幡山古墳や前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・総社二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野の国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王庵寺・国分僧寺・国分尼寺・国府など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。中世になると、戦国武将の長尾氏・上杉氏・武田氏・北条氏が鍋をけずった地として知られています。

今回、報告書を上梓する前橋城は、かつて徳川家康より「関東の華」といわれた前橋城です。その築城は古く、15世紀末に長野氏によるとされています。この城は江戸を守る北関東の押さえとして、宇都宮・川越・忍と並び、関東四名城の一つに数えられたといわれます。

今回の調査では、残念ながら前橋城関係の遺構は堀跡に留まりました。しかし、堀に積まれた石垣跡からは墨書きが多数発見され、石垣工事の実態を知る資料となりました。また、平安時代の竪穴式住居跡の調査も行うことができ、歴史の移り変わりを辿れる結果となりました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、本発掘調査事業の実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました県・市関係部局をはじめ地元関係者の方に感謝申し上げます。本報告書が本市の歴史研究や普及活動に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成 23 年 11 月

前橋市教育委員会

教育長 佐藤 博之

例　　言

1 本書は、旧中央公民館解体工事に伴い実施された「前橋城（三の丸門東地点）」（前橋市遺跡コード：23H54）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 本遺跡の所在は、群馬県前橋市大手町二丁目3番1・17・18・20である。

3 発掘調査は、平成23年5月11日から平成23年6月20日まで実施した。

4 発掘調査及び整理作業は前橋市教育委員会の指導・助言及び監督のもと、前橋市から依託された株式会社シン技術コンサルが実施した。

5 調査体制は以下のとおりである。

前橋市教育委員会 前原 豊・福田貫之

株式会社シン技術コンサル 小林朋恵（調査担当）

光松 章・志村将直・成田暎人（測量担当）

6 本書の編集は小林が行い、執筆は第1章を福田、第VI章を株式会社火山灰考古学研究所、それ以外を小林が行った。

7 本書における陶磁器の分類・実測、実測図中の遺物写真の撮影・観察表は有限会社文化財COMに、自然科學分析については、株式会社火山灰考古学研究所に依頼した。

8 本書に使用した遺構写真是小林が、写真団版に使用した遺物写真是、小池雄利亜（株式会社シン技術コンサル）が木製品を、山際哲章がその他を撮影した。

9 本調査における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管してある。

10 本書のデジタル編集は千葉和枝（株式会社シン技術コンサル）が、挿図作成は千葉と坂本勝一・関口裕子（株式会社シン技術コンサル）が行つた。

11 発掘調査の実施及び報告書刊行に至るまで、下記の機関・諸氏の御指導・御協力を賜りました。

記して感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

群馬県教育委員会 前橋市立図書館 株式会社火山灰考古学研究所 細谷印刷有限会社 山下工業株式会社

有限会社文化財COM 秋本太郎 阿久津宗二 深間陽 有山経世 飯島静男 伊藤順一 大西雅広 柿沼則久

笠原仁史 梶原勝 梶原喜世子 小池浩平 坂口一 桜井美枝 早田勉 高橋清文 高階敏昭 田代智絵

深澤敦仁 利口正史 前山由美子 三浦京子 南田法正 宮本久子 山崎芳春

12 発掘調査参加者・整理作業参加者については次のとおりである。

〈発掘調査参加者〉 池谷厚子 梅沢修 大村美枝子 岡田広志 岡田勝 齋藤文子 佐藤直夫 星野芳彦

〈整理作業参加者〉 大島美樹 鈴木澄江 星沢綾華 六反田達子

凡　例

- 本書掲載の第2図は国土地理院発行1/25,000地形図『前橋』、第1・30～33図は前橋市発行1/2,500都市計画図をそれぞれ使用した。
- 遺構平面図に示した方位は座標北であり、水準線は標高を示す。座標については、日本測地系に基づく平面直角座標IX系を使用した。
- 土層及び遺物の色調は、『標準土色帖』(農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所色票監修2002版)に掲るが、担当者の主観による識別である。
- 本書における遺構種類の略号を以下に記す。

H—堅穴住居跡　B—掘立柱建物跡　D—土坑　P—ピット　I—井戸跡　W—溝跡・堀跡　A—道路状遺構

X—瓦だまり・性格不明遺構

- 本文・図面に示す火山灰名を以下に記す。

As-A = 浅間 A 軽石、天明三年(1783)降下 As-B = 浅間 B テフラ、天仁元年(1108)降下

Fr-FP = 標名・二ツ岳伊香保テフラ Fr-FA = 標名・二ツ岳荒川テフラ As-C = 浅間 C 軽石

As-Sj = 浅間・總社軽石 As-YP = 浅間・板鼻黄色軽石 As-Ok2 = 浅間・大塙沢第2軽石

As-Ok1 = 浅間・大塙沢第1軽石 As-Sr = 浅間・白糸軽石 As-BP = 浅間・板鼻褐色軽石

- 挿図において、使用しているトーンは図中に凡例を示した。

- 遺物番号は、遺構図・遺物実測図・観察表・写真図版とともに統一しており、遺構図中では土層番号等と区別するため番号の前にNo.を付した。
- 遺物実測図・写真の縮尺は1/3を基本とし、1/2・1/4等の場合は実測図・写真中に縮尺を記載した。
- 陶磁器以外の土器実測図において、残存が1/2未満の場合断面図側の口縁部及び底部線を中軸線から離した。
- 遺構の平面・断面形状の分類を以下に示す。

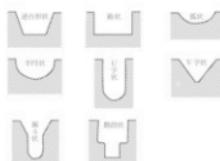
平面形状

円形	円形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
楕円形	円形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍以上1.5倍未満のもの。
長楕円形	円形を基調とし、長軸が短軸の1.5倍以上もののもの。
方形	方形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
長方形	方形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍以上のもの。



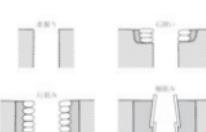
断面形状

逆台形状	底部に平坦面を持ち、傾斜から急斜面に立ち上がるもののもの。
扁状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもののもの。
弧状	底部に平坦面を持たない楕円で、傾斜から立ち上がるもののもの。
半円状	底部に平坦面を持たない楕円で、急斜面に立ち上がるもののもの。
U字状	複雑な長軸よりも深さの積が大きくて、ほぼ直に立ち上がるもののもの。
V字状	点的な底部を持ち、急傾斜に立ち上がるもののもの。
脛斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。広い中段(テラス)を持つものも含める。



(荒川・加藤 1999 から転載、一部改変)

井戸跡形態分類



(荒川・片野他 1999 から転載、一部改変)

目 次

巻頭図版 1 ~ 4

はじめに

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅲ章 調査方針と経過	4
第Ⅳ章 基本層序	6
第Ⅴ章 遺構と遺物	7
第1節 遺構	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) 捩立柱建物跡	7
(3) 上坑	8
(4) ピット	9
(5) 井戸跡	9
(6) 溝跡	9
(7) 再築前橋城三の丸外脇跡	11
(8) 道路状遺構	12
(9) 瓦だまり	12
(10) 性格不明遺構	13
第2節 遺物	13
(1) 古代以前の遺物	13
(2) 磁器	13
(3) 陶器	14
(4) 中近世の土器	15
(5) その他の遺物	15
第VI章 地質調査とテフラ検出分析	46
第1節 はじめに	46
第2節 土層の層序	46
(1) W-11号堀跡セクション A-A'	46
(2) W-11号堀跡セクション A-A' 南地点	46
(3) W-7号溝跡	46
第3節 テフラ検出分析	47
(1) 分析試料と分析方法	47
(2) 分析結果	48
第4節 考察	48
第5節 まとめ	49
第VII章 まとめ	50
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図 調査区位置図	2
第 2 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第 3 図 グリッド設定図	4
第 4 図 調査区全体図	5
第 5 図 基本土層柱状図	6
第 6 図 調査区北部分割図 1	26
第 7 図 調査区北部分割図 2	27
第 8 図 調査区南部分割図 1	28
第 9 図 調査区南部分割図 2	29
第 10 図 H-1・2号住居跡、D-1～4号土坑	30
第 11 図 D-5～11号土坑、I-1・2号井戸跡	31
第 12 図 W-1・2・4・5号溝跡	32
第 13 図 W-10号溝跡	33
第 14 図 W-11号幅跡（1）	34
第 15 図 W-11号幅跡（2）	35
第 16 図 W-11号幅跡（3）、X-1・2号瓦だまり	36
第 17 図 X-4号性格不明遺構	37
第 18 図 H-1・2号住居跡、D-1号土坑出土遺物	37
第 19 図 D-2・4・8号土坑、P-2号ピット出土遺物	38
第 20 図 P-3・10・13・20・29・35・50・55・56・85・93号ピット出土遺物	39
第 21 図 P-94・133・191～193号ピット、I-2号井戸跡、W-1・2号溝跡出土遺物	40
第 22 図 W-3～6・10号溝跡出土遺物	41
第 23 図 W-10号溝跡、W-11号幅跡出土遺物	42
第 24 図 W-11号幅跡、X-1・2号瓦だまり、X-3号性格不明遺構出土遺物	43
第 25 図 近世整地層（田畠）出土遺物	44
第 26 図 近世整地層（田畠）、表土出土遺物	45
第 27 図 W-11号幅跡セクション A-A'の土層柱状図	47
第 28 図 W-11号幅跡セクション A-A'南地点の土層柱状図	47
第 29 図 W-7号溝跡覆土の土層柱状図	47
第 30 図 再築前橋塀復元図と調査区	51
第 31 図 陣屋時代の前橋塀絵図と本調査区	52
第 32 図 松平氏時代の前橋塀絵図と本調査区	53
第 33 図 酒井氏時代の前橋塀絵図と本調査区	54
第 34 図 明治 25 年の調査区周辺の市街図	55

表目次

第 1 表 周辺の遺跡一覧	3
第 2 表 穴穴住居跡（H）観察表	16
第 3 表 土坑（D）観察表	16
第 4 表 ピット（P）観察表（1）	16
第 5 表 ピット（P）観察表（2）	17
第 6 表 ピット（P）観察表（3）	18
第 7 表 井戸跡（I）観察表	18
第 8 表 溝跡・幅跡（W）観察表	19
第 9 表 道路状遺構（A）観察表	19
第 10 表 瓦だまり・性格不明遺構（X）観察表	19
第 11 表 中近世遺物集計表（1）	19
第 12 表 中近世遺物集計表（2）	20
第 13 表 中近世遺物集計表（3）	21
第 14 表 中近世遺物集計表（4）	22
第 15 表 遺物観察表（1）	23
第 16 表 遺物観察表（2）	24
第 17 表 遺物観察表（3）	25
第 18 表 テフラ検出分析結果	48

写真図版目次

PL.1 調査区遠景、調査区 全景	PL.4 W-11号幅跡 全景・石垣・根石（66）出土状況・ 石垣断ち割り・調査風景、X-1号瓦だまり 遺物出土状況、 X-4号性格不明遺構 全景
PL.2 調査区北部 全景	PL.5 出土遺物（1）
PL.3 H-1・2号住居跡 床面全景、D-1～4号土坑 全景、 P-12号ピット 全景、P-193号ピット セクション A、 I-2号井戸跡 断ち割り、W-1・2号溝跡 全景、W-10号 溝跡 全景・断ち割り	PL.6 出土遺物（2）
	PL.7 出土遺物（3）

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成23年2月10日付で、前橋市役所管財課より旧中央公民館の解体工事を行なう際に隣接する駐車場の一部を掘削することが示された。これを受けて前橋市教育委員会は、該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地（前橋城）であり、さらに平成21年12月14・16日に実施された群馬県教育委員会文化財保護課の試掘調査により前橋城の堀跡が確認されているため、事前の発掘調査が必要である旨を回答した。遺跡の現状保存について協議を重ねたが、掘削を伴う解体工事は避けられないため、記録保存を目的とした発掘調査について調整を行なった。

平成23年4月11日付で前橋市長 高木政夫（管財課）より旧中央公民館解体工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受けて教育委員会では直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織を導入して発掘調査を実施することとした。民間調査組織の導入については依頼者である前橋市の合意も得られ、市教委の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することになり、同年5月9日付で前橋市と民間調査組織である株式会社シン技術コンサル前橋営業所長 横原悟との間で業務委託契約が締結され、同年5月11日から現地調査が開始された。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地（第1・2図、第1表）

前橋市は、群馬県の中央部やや南に位置する中核市である。市域の北部には上毛三山の一つである赤城山の南麓が広がり、南部は関東平野の北西端部の一角を占めている。北東端部には、複成火山である赤城山の最高峰となる外輪山の黒檜山（1,828m）がある。北部は北から南に緩斜し、市街地の広がる平野部は海拔100m前後となる。やや西部を南流する利根川は、中世までは前橋市街地の北東に帶状に延びる旧流路を流れていたが、近世初頭にはほぼ現在の流路に移動したとされる。

市域南部、利根川左岸の前橋台地上に位置する前橋城（1）は、群馬県庁や前橋市役所を含む直径1km弱を遺跡範囲とし、これまで複数の調査が実施されている（1a～1i）。今回調査した三の丸門東地点は（1a）、遺跡のはば中央部に位置する。

第2節 歴史的環境（第1・2図、第1表）

本遺跡の周辺では、旧石器時代の遺跡の調査例はない。縄文時代は、元總社蒼海遺跡群（3）・産業道路東遺跡（5）・産業道路西遺跡（6）などで前期～後期の住居跡などが調査されている。前橋城域の調査では、河道から加曾利E3式の縄文土器が出土している（1i）。縄文時代の晩期から弥生時代にかけて集落跡の調査例はないが、元總社北川遺跡や元總社牛池川遺跡（4）の河道から、縄文時代晚期の注口土器や弥生時代中期後半の竜見町式の土器、後期の樽式の土器が出土しており、周辺の台地上に当該期の集落の存在が示唆されている（坂口他 2007）。

古墳時代以降は遺跡数が増加し、集落跡や水田が多数調査されている。特に本遺跡の西方、現利根川の右岸は、古墳時代後期以降における上野国の中心的な地域であり、王山古墳（20）などの首長墓や上野国府（2）、上野国分寺が存在する。本遺跡は、現況ではこの地域とは利根川で分断されているが、変流以前は同一地域の東端部であったと考えられるだろう。前橋城域の遺跡では、5世紀末～6世紀前半と推定される円墳が調査されている（1g）ほか、9世紀代を中心とする住居跡が調査されており（1a・1d・1i）、本来は広範囲にわたって古代の集

落が存在したと考えられる。

天仁元年（1108）の浅間山噴火によって上野国は甚大な被害を受け、この時焼失した水田が県域で多数調査されている。この灾害は上野国における莊園成立を活発化させた契機でもあり、そのもとで武士が台頭していくとを考えられる。室町時代には、上野国守護代に任命された長尾氏によって国府の地に蒼海城（19）が築かれた。前橋城はもともと厩橋城と呼ばれ、築城については判然としないが、一説には利根川変流以前に箕輪城の長野氏が石倉の地に築いた城が元であるとされている。文献において最初に登場するのは永正七年（1527）であり、戦国期には上野国の要であったことから上杉・武田・北条・後北条氏に翻弄される。

その後、徳川家康によって天正十八年（1590）に側近の平岩親吉が封じられ、平岩氏の国替えによって慶長六年（1601）に武蔵国川越から酒井忠重が入封された。この酒井氏のもと厩橋城は近世城郭として整備され、慶安二年（1648）には前橋城と改称された。寛延二年（1749）には藩主の酒井忠恭が播磨国姫路に移り、かわつて松平朝矩が入封されたが、酒井氏時代から悩まされた利根川の洪水や川欠けによる城への被害、前橋城下での大火によって明和四年（1767）には武蔵国川越に移城してしまった。前橋城は取り壊されるが、前橋は川越藩の分領として陣屋が設置され、天保年間に町奉行安井与左衛門のもと利根川の流路を変える大事業が成功したことでの水害の不安は軽減された。かねてから領民は城主不在による町の衰退を嘆き領主帰城を切望しており、幕末になって生糸貿易から急速に財を蓄えた商人を中心とした領民から再築資金が献金されることもあって、藩主松平直克は文久二年（1862）に前橋城の再築内願書を幕府に提出し、翌年受理され本格的に前橋城の再築が起工された。慶応二年（1866）にはほぼ完成し、慶応三年（1867）に直克が帰城したことによって日本で最も新しい城として復活した。再築前橋城の縄張りは渦郭式で、土墨の要所に砲台が設置されるなど近代的な城郭であった。しかし、再築前橋城は明治維新という時勢のなか城として機能することはなく、後に群馬県庁として使用された本丸を残してすぐに取り壊されることとなった。

註1：現在の前橋城の対岸にある石倉城跡（16）は、武田信玄が厩橋城攻略のため築いた城であり、厩橋城の契機となった石倉の城ではないとされる（井川・片野1997）。



第1図 調査区位置図



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	主な時代・概要	参考文献
1	前城城	國文(須佐解) 古墳(須佐・水田) 奈良～平安(聚落・水田) 中世(城址・道路状況調査) 近世(城郭)	a : 2011 「前城城(三の丸東地点)」市教委 b : 2010 「前城城(南曲輪地点)2」市教委 c : 2009 「前城城(南曲輪地点)」調査班 d : 2008 「前城城(辛御門丸馬出遺跡の調査)」市教委 e : 2006 「前城城(丸馬出)」群理文 f : 2004 「前城城(丸馬出)」調査班 g : 2003 「前城城(丸馬出)」群理文 h : 1996 「前城城／丸馬出城跡」群理文 i : 1997-1999 「前城城跡1・2」群理文
2	上野城跡 指定区域内の遺跡	國文(集落) 古墳(須佐・水田) 奈良～平安(聚落・水田) 中世(城址・道路状況調査) 近世(城郭)	1968 「元能登守御所跡(須佐)」市教委 1963-64-65-66-67-68-69 「元能登守御所跡」 1~XIII市教委・調査会 1987-88 「大字須佐Ⅱ・Ⅲ遺跡」 調査会 1993-94-95-96 「元能登守御所跡」 1~III群理文 1987 「天王寺遺跡」 市教委他
3	元能登守御所跡群	國文(集落)、古墳～平安(聚落・水田)、中世(城址・墓地)	2005-06~11 「元能登守御所跡群(1)~(34)」 調査班・市教委
4	元能登守御所跡 他	古墳～中世(聚落・水田・高・粘土探査坑)	2007 「能登守御所跡北濃守古道跡」 元能登守御所跡・北濃守小見内V遺跡」 群理文
5	産業道路東遺跡	國文(住居)	1971 「前橋市史」 第一卷 前橋市
6	産業道路西遺跡	國文(住居)	2003 「福井県東遺跡」 群理文
7	福井県東遺跡	古墳～平安(聚落・植生・採掘跡)	2002 「能登守御所跡大道西遺跡」 調査活他
8	鶴井守禰守家大道西遺跡 他	古墳～奈良(聚落)、中世(築)	1988 「福井県東遺跡」 山武考古学研究会他
9	無地遺跡	奈良～平安(聚落)	1998 「大字守禰守家大道西遺跡」 市教委
10	大字守禰守家大道西遺跡	平安(水田)	2001 「石臼下宅遺跡 紅糸村東遺跡」 行町石糸村振興課調査会
11	元能登守御所跡	國文(土坑)、古墳(溝)、平安(住居・鉄鋤跡)	1995 「元能登守御所跡」 群馬松川町会振興課調査会
12	石臼下宅地遺跡	古墳、平安(聚落)、近世(耕作)	2001 「石臼下宅地遺跡」 行町石糸村振興課調査会
13	紅糸村東遺跡	平安(住居・水田)、中世(土坑)	2008 「南砺市之井遺跡」 調査会
14	南砺市之井遺跡	古墳～平安(聚落)	2006 「文京町N-1遺跡」 市教委
15	文京町N-1遺跡	平安(水田)	1989 「群馬県中世城跡」 市教委
16	石倉城跡	中世(城址)	山崎・1971 「群馬県古城邑址の研究」 上巻
17	大友城	中世(城址)	1989 「群馬県中世城跡」 市教委
18	村山城	中世(城址)	山崎・1971 「群馬県古城邑址の研究」 上巻
19	音海城	中世(城址)	1989 「群馬県中世城跡」 市教委
20	玉山古墳	前方後円墳 6世紀の須佐造	柏島栄次・中村義人・石島和夫. 1993 「前城城跡山玉山古墳の調査」 「日本考古学会合会第57回総合発表会要旨」 日本考古学会合会
21	船岡山古墳	円墳・6世紀後半須佐造	1974 「群馬県船岡山古墳」 1(東毛編) 市教委
22	御前山古墳	斜平	1971 「前橋市史」 第一卷 前橋市
23	前城城跡9号古墳	終末期古墳	1938 「玉山古墳和観」 群理文

市教委・群馬県教育委員会 市教委・前橋市教育委員会 調査会・前橋市理政文化財発掘調査会 群理文・財团法人群馬県理政文化財調査事業団

第III章 調査方針と経過

前橋城（三の丸門東地点）において、旧中央公民館解体工事に伴い調査対象となった総面積は248m²であり、平成23年5月11日から6月20日まで発掘調査を実施した。

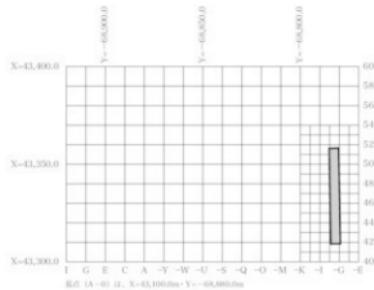
調査は0.45m³のバックホウを使用して表土（I・II層）を掘削した後、近世整地層（III層）上面でジョレン・移植ゴテなどを用いて人力で遺構確認・掘削を行った。なお再築前橋城三の丸外堀跡（W-11）のみ、掘削にバックホウを併用した。調査を進行するなか、遺構の壁や断面、調査区に掘削したトレーナーから、遺構覆土がIII層と近似しているためにIII層上面では確認することが困難な遺構や、IV層上面から掘り込まれている遺構の存在が明らかになった。そのためIII層上面で調査した遺構を記録した後、人力でIV層上面まで掘り下げて再度遺構確認及び調査を実施した。

写真記録は、35mmカラーリバーサルフィルム・同モノクロネガフィルムの2種類を使用し、デジタルカメラによる補足撮影も行った。全体撮影では、6×7版カラーリバーサルフィルム・同モノクロネガフィルムも使用した。作図作業は、トータルステーションによる器械測量と写真測量を併用した。

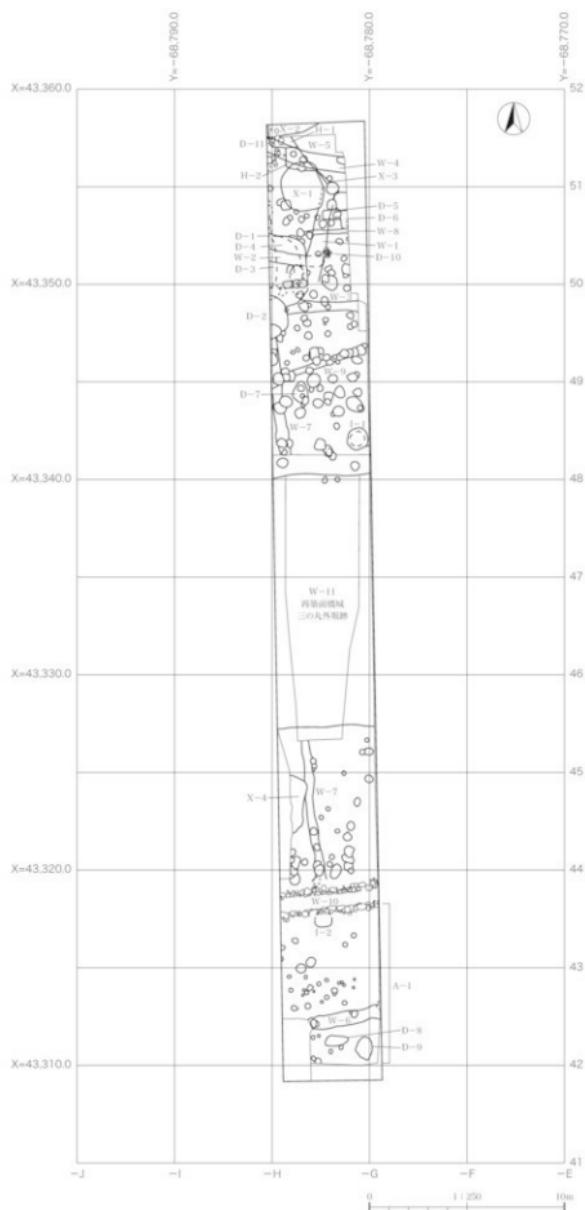
グリッドは、群馬県が実施した前橋城跡1次～7次調査（井川・片野1997、藤巻・片野他1999）に合わせて設定した（第3図）。このグリッドは日本測地系に基づく平面直角座標第IX系の座標軸を用い、X=43,100.0m・Y=-68,880.0mを基点A-0として5m方眼を組んで設定されており、グリッドの基点は南東角で、南北にアラビア数字、東西にアルファベットがふらされている。本調査区は基点からみると北東部に位置しているため、アルファベットにマイナス（-）を付した。

調査の経過は以下に記す。

5月11日	調査範囲内の舗装（アスファルト）切断作業。 プレハブ・機材搬入。	6月3日	調査区北部人力によるIII層掘削作業終了。 重機によるW-11下部埋め戻し、石垣検出作業。
5月12日	ブロック堆・舗装撤去作業開始。	6月10日	調査区北部全景写真撮影。
5月13日	調査区北部より表土掘削開始。	6月15日	全景写真撮影。
5月16日	人力による遺構調査。重機によるW-11 掘削開始。	6月17日	重機によるW-11 石垣解体開始、掘り方検出。
5月17日	重機による表土掘削及びW-11 掘削終了。	6月18日	重機によるW-11 石垣解体終了。
5月26日	W-11セクションA写真撮影。	6月19日	重機によるW-10 斷ち割り。根石・築石、 樹木実測。
5月27日	調査区北部人力によるIII層掘削作業開始。	6月20日	調査区埋め戻し終了。プレハブ・機材搬出。 現場引渡し。



第3図 グリッド設定図



第4図 調査区全体図

第IV章 基本層序

本遺跡では、I～XV層の基本土層を確認した。(第5図)

I層は現代の盛土層であり、10層(Ia～Ij)に細分される。II層は明治時代の砂質シルト層であり、2層(IIa, IIb)に細分される。III層は近世の整地層であり、6層(IIIa～IIIf)に細分される。As-BやAs-Cと考えられる鉱石が含まれており、近世の遺構覆土と近似している。再築前橋城三の丸外堀跡(W-11)は、IIIa層上面から掘り込まれていた。調査区北部にのみ堆積しており、南部では確認できない。III層一括で取上げた出土遺物は、細分された層位ごとに取上げることが困難であったが、調査状況から主にIIIa～IIId層に包含されていたと考えられる。遺物の時期は18世紀代を主体とし、少數ながら中世に遡るものも含まれている。近代の遺物が1点のみ出土しているが、混入と考えられる。

IV層は褐色粘質土である。本遺跡では、周辺の調査で確認されているAs-C混土は削平されていたと考えられる。V層は総社砂層相当であるが、肉眼ではAs-Sjを確認することはできなかった。VI層はAs-YP層であり、2層(Vla, Vlb)に細分される。VII層は前橋泥炭層相当である。VIII層は黒褐色シルト層である。IX層は灰黄色シルト層であり、As-Ok2と思われる鉱石を含む。X層はAs-Okを微量に含むシルト層であり、2層(Xa・Xb)に細分される。XI層はAs-Ok1の凝縮層である。XII層はマンガンを多量に含む黒褐色土層である。XIII層はAs-Srとマンガンを含む灰黄色土層である。XIV層はAs-BPグループであり、As-BPの含有量で3層(IIIa～IIIc)に細分される。XV層は前橋泥流堆積物である。

L=108.00m

	アスファルト HTs	
L=107.00m	I	I. 近代～現代の盛土。 a. 黒褐色 (10YR3/1) 現代。下部酸化（空洞時の剥け面か）。しまりやや強。粘性やや弱。 b. にじみ黄褐色 (10YR7/4) 現代。しまりやや強。粘性やや弱。 c. にじみ黄褐色 (10YR7/4)～黒褐色 (10YR3/1) 明治時代～戦前。黒褐色土主体部分と黒褐色土主体部分が同時に堆積。しまりやや強やや弱。 d. 黒褐色 (10YR3/2) 明治時代～戦前。鉄石・磁化物・酸化鉄粒少量含。しまり・粘性やや強。 e. 開墾地 (10YR3/1) 明治時代～戦前。鉄質シルト。しまり弱。粘性強。 f. 灰色 (N4) 明治時代～戦前。鉄質シルト。しまり弱。粘性強。 g. にじみ黒褐色 (10YR4/3) 明治時代～戦前。鉄質シルト。しまりやや弱。粘性強。 h. 黒褐色 (10YR4/1) 明治時代～戦前。鉄質シルト。しまり・粘性強。 i. にじみ黒褐色 (10YR4/3) 明治時代～戦前。砂質シルト。小礫・砂粒やや多量含。しまり・粘性やや強。 j. 黒褐色 (10YR3/2) 明治時代～戦前。鉄石・磁化物・酸化鉄粒少量含。しまり・粘性やや強。
	II	II. 明治時代・砂質シルト層。 a. 暗褐色 (10YR4/1) 砂質シルト。粗石多量、磁化物微量含。しまり・粘性やや強。調査区南端部非常に強。 b. 暗灰色 (10YR5/1) 砂質シルト。細砂多量、暗灰微量含。しまり・粘性やや強。
	III	III. 近世整地層。 a. 黒褐色 (10YR3/2) 鉄石・磁化物・酸化鉄粒少量含。しまり・粘性やや強。 b. 黒褐色 (10YR3/1) 鉄石やや多量、磁化物・酸化鉄粒微量含。しまり・粘性やや強。 c. 黒褐色 (10YR3/1) 鉄石・磁化物・酸化鉄粒微量含。しまり・粘性やや強。 d. 黑褐色 (10YR4/1) 鉄石・磁化物・酸化鉄粒微量含。しまり・粘性やや強。 e. 黑褐色 (10YR4/5) 黒褐色土上に黒褐色土を含。しまり・粘性やや強。 f. 黑褐色 (10YR4/1) 鉄石・磁化物・酸化鉄粒少量含。しまり・粘性やや強。 g. 黑褐色 (10YR4/1) 鉄石・磁化物・酸化鉄粒少量含。しまり・粘性非常に強。 h. 淡褐色 (2.5Y7/3) 地球砂層相当。しまり強。粘性弱。
	IV	IV. As-YP層。しまり・粘性強。 a. 灰白色 (2.5Y8/1) 大きな灰。 b. 灰色 (N6) As-YP 菊池層。部分的に発達。
L=106.00m	V	V. 黒色 (N1.5%) 磁化泥炭層相当。しまり弱。粘性非常に強。
	VI	VI. 黒褐色 (10YR3/2) シルト。土厚 (1～2cm) 黒色。しまり・粘性強。
	VII	VII. 黑褐色 (10YR3/1) シルト。As-OK ?やや多量含。しまり・粘性強。
	X	X. 黑褐色 (10YR4/2) シルト。土厚 (1～4cm) 黒色。As-OK 微量含。しまり・粘性強。
	XI	XI. にじみ黒褐色 (10YR4/3) シルト。As-OK 微量含。しまり・粘性強。
	XII	XII. 黑褐色 (10YR4/2) マンガン (径 2～5cm) 多量、鉄石 (As-OK か As-Sr) 少量含。しまり強。粘性やや強。 XIII. 黑褐色 (10YR4/2) As-Sr 多量、マンガン (径 2～5cm) やや多量含。しまり強。粘性やや強。
	XIV	XIV. As-BP グループ。しまりやや強。粘性非常に強。 a. 暗色 (10YR4/4) As-BP 菊池層。 b. 黑褐色 (10YR4/2) As-BP 少量。 c. 暗色 (10YR4/4) As-BP 多量。
L=104.00m	XV	XV. 品青灰色 (5BG4/1)～明青灰色 (5BG7/1) 前橋泥流堆積物。小礫 (径 1～5cm) 多量含。しまり強。粘性やや強。
		(S=1/40)

第5図 基本土層柱状図

第V章 遺構と遺物

第1節 遺構

本遺跡で検出された遺構は、堅穴住居跡2軒（H-1・2）、掘立柱建物跡4棟（B-1～4）、土坑11基（D-1～11）、ビット176基（P-1～205、掘立柱建物跡のビットとした29基を除く）、井戸跡2基（I-1・2）、溝跡10条（W-1～10）、再築前橋城三の丸外堀跡1条（W-11）、道路状遺構1条（A-1）、瓦だまり2ヶ所（X-1・2）、性格不明遺構2基（X-3・4）である。

（1）堅穴住居跡

堅穴住居跡は2軒（H-1・2）検出され、時期は両者ともに9世紀後半であると考えられる。

H-1号住居跡（第10・18図 第2・15表 PL.3・5）

位置 -G-H-51 グリッドに位置し、IV層上面で検出された。重複 D-11、P-203、W-4・5、X-2より古く、H-2より新しい。形状・規模 平面形状は方形ないし長方形で、主軸方向 N-5°-W、東西 2.11m 以上、南北 1.20m 以上、面積 2.53m² 以上を測る。壁は斜めに立ち上がり、確認面からの深さは 0.24m 程度、床面標高は 106.16m 前後である。竈 不明である。遺物 覆土中から出土した須恵器の甕（1）を図示した。このほか、須恵器片 6 点、土師器片 5 点、珪質頁岩の打製石斧 1 点が出土している。時期 出土遺物から 9世紀後半であると考えられる。

H-2号住居跡（第10・18図 第2・15表 PL.3・5）

位置 -G-51 グリッドに位置し、IV層上面で検出された。重複 H-1、D-11、P-99・105・106、W-4・5、X-1より古い。形状・規模 平面形状は方形ないし長方形で、主軸方向 N-5°-E、東西 2.18m 以上、南北 1.21m 以上、面積 2.64m² 以上を測る。壁は斜めに立ち上がり、確認面からの深さは 0.15m 程度、床面標高は 106.20m 前後である。竈 不明である。遺物 覆土中から出土した須恵器の甕（2）と土師器の甕（3）、掘り方から出土した丸瓦（4）を図示した。（2）は H-1 から出土した破片と接合している。このほか、鉄滓 1 点が出土している。時期 出土遺物から 9世紀後半であると考えられる。

（2）掘立柱建物跡

今回抽出した4棟（B-1～4）の掘立柱建物跡は、調査区が細長いことや狭い範囲内で多数のビットが検出されたことなどからあくまで推定であり、今後隣接地が調査される際には再検討を要する。なお掘立柱建物を構成するビットは全て個別のビット番号が付されており、第4～6表に形状・規模を記載している。

B-1号掘立柱建物跡（巻頭図版3・4 第7・20図 第4・5・12・15表 PL.2・5）

位置 -G-48・49 グリッドに位置する9基のビット（P-1・3・4・7・13・16・33・58・115）で構成される。重複 P-15より古く、P-17・24・42・74・120、I-1、W-7・9より新しい。

形状・規模 東西棟の総柱建物と推定され、桁行2間（3.81m）以上、梁行2間（3.27m）、棟方向は N-90°である。桁行の柱間寸法は P-1・3、P-33・7、P-115・13 間が 1.89m、P-3・4、P-7・16、P-13・58 間が 1.92m、梁行の柱間寸法は P-1・33、P-3・7、P-4・16 間が 1.38m、P-33・115、P-7・13、P-16・58 間が 1.89m を測り、総面積は 12.46m² 以上である。柱穴 柱痕跡が確認できたビットはないが、P-3・4・13・16・33・58・115 からは礎板石や根石と考えられる自然石が出土している。遺物 P-3 から出土した瀬戸・美濃産陶器の白天目茶碗（21）、捕鉢（22）、カワラケ（23）、P-13 から出土した珪質粘板岩の甕（25）を図示した。このほか、P-4・7・13・16・33・58 から陶磁器・灰釉陶器・須恵器・土師器の破片が出土している。

時期 江戸時代。確認面から18世紀中葉以降と考えられる。

B-2号掘立柱建物跡（巻頭図版2・4 第7・20図 第4・5・12・15表 PL.2）

位置 -H・-G-49 グリッドに位置する6基のピット（P-9・26・32・47・81・85）で構成される。

重複 D-2、P-25・31より古く、D-1・3・4、P-51・76・82・87～89、W-7より新しい。

形状・規模 東西棟の総柱建物と推定され、桁行2間（1.83m）以上、梁行2間（3.21m）、棟方向はN-86°-Eである。桁行の柱間寸法はP-47・85、P-26・81、P-32・9間が1.81m、梁行の柱間寸法はP-47・26、P-85・81間が1.70m、P-26・32、P-81・9間が1.51mを測り、総面積は5.87m²以上である。柱穴 P-9の断面に柱痕跡が確認できたほか、P-26・85からは礎板石や根石と考えられる自然石が出土している。

遺物 P-85から出土した肥前産陶器の呉器手碗（32）、瀬戸・美濃産陶器の擂鉢（33）を図示した。このほか、P-9・85から陶磁器・近世瓦・須恵器・土師器の破片が出土している。時期 江戸時代。D-1より新しいことから18世紀後半以降と考えられる。

B-3号掘立柱建物跡（第6図 第4・5・12表 PL.2）

位置 -G-49・50 グリッドに位置する6基のピット（P-30・64・77・80・112・122）で構成される。B-4とは同一遺構の可能性もあるが、重複関係と柱筋が通らないことから別遺構として報告する。重複 P-79、W-2より古く、D-1・4、P-50より新しい。また柱穴の配置から、P-30とP-122間にピットが存在したが重複遺構によって破壊された可能性がある。形状・規模 東西棟の側柱建物と推定され、桁行2間（2.91m）以上、梁行2間（2.90m）、棟方向はN-78°-Eである。建物範囲内に位置する複数のピットは、柱筋は通らないが束柱であった可能性も考えられる。桁行の柱間寸法はP-122・30間が2.71m、P-64・80間が1.38m、P-80・77間が1.53m、梁行の柱間寸法はP-122・112間が1.50m、P-112・64間が1.40mを測り、総面積は8.44m²以上である。柱穴 P-30・64の断面に柱痕跡が確認できたほか、P-30からは根石と考えられる自然石が出土している。遺物 P-112から中世常滑窯の焼成片が出土している。時期 江戸時代。D-1より新しいことから、18世紀後半以降と考えられる。

B-4号掘立柱建物跡（第6図 第4～6・12表 PL.2）

位置 -G-49、-G・-H-50 グリッドに位置する8基のピット（P-45・54・68～70・75・87・204）で構成される。B-3とは同一遺構の可能性もあるが、重複関係と柱筋が通ないことから別遺構として報告する。

重複 D-1、P-29・47・50、W-1より古く、D-4～6、P-71・88、W-7より新しい。またP-35・36によって、P-45とP-87間に位置するピットが破壊されていたと推定される。形状・規模 東西棟の側柱建物と推定され、桁行4間（3.52m）以上、梁行2間（3.15m）、棟方向はN-82°-Eである。建物範囲内に位置する複数のピットは、柱筋は通らないが束柱であった可能性も考えられる。桁行の柱間寸法はP-68・75間が0.99m、P-75・69間が0.88m、P-69・70間が0.67m、P-70・204間が0.98m、P-45・87間が2.19m、梁行の柱間寸法はP-68・54間が1.37m、P-54・45間が1.78mを測り、総面積は11.09m²以上である。

柱穴 P-68・69・87の断面・底面に柱痕跡が確認できたほか、P-54からは礎板石と考えられる礎が出土している。遺物 P-45から陶磁器・内耳鍋・カワラケ・灰釉陶器・須恵器・土師器・内面黒色土器の破片が出土している。時期 江戸時代。出土遺物とD-1より古いことから17世紀後半から18世紀後半と考えられる。

（3） 土坑（巻頭図版2～4 第10・11・18・19図 第3・11・12・15表 PL.1～3・5）

土坑は11基（D-1～11）検出された。D-10・11は、礎が集中して出土した範囲に掘り込みがあったと推定されることから土坑として報告する。

D-1～4は重複しており、構築は古い順からD-4→D-3→D-1→D-2である。他の遺構と比べると遺物の出土量が若干多いが性格は不明である。D-1は底面に、D-2は覆土中に炭化物の集中層が堆積してい

た。時期が最も古い D-4 からは、17世紀前葉より年代が下る遺物は出土していない。出土遺物から、D-1 は18世紀後半、D-2 は19世紀前半から中葉と考えられる。D-1 からは明治時代以降の遺物が出土しているが、土坑範囲内の上位に堆積する II 層が埋んでいることから混入と考えられる。

他の土坑の時期は、確認面・重複遺構・出土遺物から D-5・7・10・11 は江戸時代、D-8・9 は中世～江戸時代、D-6 は江戸時代以前と考えられる。D-8～11 から集中して出土した礎は、根固め石（栗石）の可能性がある。

(4) ピット (巻頭図版2・3 第6～9・19～21図 第4～6・12表 PL.1～3・5)

調査段階で 205 基検出されたピットのうち 29 基を掘立柱建物跡として抽出したため、176 基を単独のピットとして報告する。ピットは、再築前橋城三の丸外堀跡 (W-11) の北方にあたる -G-48～51 グリッドから特に集中して検出された。

確認面・重複遺構・出土遺物から、江戸時代に構築されたと判断できるピットは 106 基であり全体の 6 割に及ぶ。江戸時代の構築と判断できるピットのなかに、礎板石や根石の可能性が高い自然石が出土したものや、柱根や柱の抜き取り痕が空洞のまま残っていた例があったことから、同例のピットも江戸時代に含めている。P-191 は残存状態の良い須恵器の小型短頸壺 (37) が出土しており、遺物から平安時代と考えられる。その他の 69 基のピットは、詳細な時期は不明で古代から江戸時代の何れかに構築されたと考えられる。そのなかでも -G-42・43 グリッドに位置する比較的小型なピット群は、A-1 より古く覆土から古代の可能性が高い。

(5) 井戸跡

井戸跡は 2 基 (I-1・2) 検出された。時期は I-1 は不明、I-2 は江戸時代と考えられる。

I-1号井戸跡 (第11図 第7表 PL.2)

位置 -G-48 グリッドに位置し、IV層上面で検出され III 層に被覆されていた。調査区壁際に位置し、崩落の危険があつたため底面まで完掘していない。重複 P-115 より古く、P-97 より新しい。形状・規模 素掘り円筒形の井戸であると推定され、平面形状は円形である。長軸 1.08m、短軸 1.05m、深さ 1.00m 以上を測り、底面標高は 105.32m 以下である。遺物 出土していない。時期 不明。

I-2号井戸跡 (第11・21図 第7・12・16表 PL.3・6)

位置 -G-43 グリッドに位置し、IV層上面で検出された。重複 W-10・A-1 より古い。

形状・規模 素掘り円筒形の井戸であり、平面形状は円形である。長軸 0.86m、短軸 0.83m、深さ 1.72m を測り、底面標高は 104.50m である。遺物 覆土中層の壁際から直立して出土した曲物の底板 (40) と竹筒 (41) を図示した。(41)は節がそのままで短いが、出土状況から井戸を埋める際の息抜きとして使用されたと考えられる。下層から底面にかけて人頭大の礎がまとまって出土しているほか、カワラケ・木製品・木材・人骨の可能性もある頭骨破片が出土した。時期 W-10・A-1 より古いくことから 18世紀後半以前と考えられる。

(6) 溝跡

溝跡は 10 条 (W-1～10) 検出された。時期は W-1～6・8～10 は江戸時代、W-7 は江戸時代以前であり、平安時代の可能性も考えられる。

W-1号溝跡 (巻頭図版3 第12・21図 第8・12・16表 PL.3・6)

位置 -G-50 グリッドに位置し、III d 層上面で検出された。重複 D-10、X-1 より古く、D-4・5・6、P-37・48・50・53・60・75・84・87・131、W-2・7・8 より新しい。形状・規模 北から南 (N-11-E) に走行し、検出長 4.89m、幅 0.67～0.88m、深さ 0.24m を測る。断面形状は階段状、底面は平坦で、底

面標高は106.43m前後である。 遺物 堺産陶器の捕鉢（42）、焼壺壺（43）、カワラケ（44）を図示したほか、陶磁器・カワラケ・焼壺壺・須恵器・古瓦の破片が出土している。 時期 江戸時代。W-2より新しいことから18世紀後半以降と考えられる。

W-2号溝跡（巻頭図版3 第12・21図 第8・12・16表 PL.3）

位置 -G・-H-50 グリッドに位置し、D-1 覆土上面で検出された。 重複 W-1より古く、D-1・3・4、P-30・50・60より新しい。 形状・規模 西から東（N-81°-W）に走行し、検出長2.85m、幅0.52～0.59m、深さ0.39mを測る。断面形状は弧状、底面は平坦で、底面標高は106.30m前後である。 遺物 濑戸・美濃産陶器の天目茶碗（45）を図示した。 時期 江戸時代。D-1より新しいことから18世紀後半以降と考えられる。

W-3号溝跡（巻頭図版2 第6・7・22図 第8・12・16表）

位置 -G-49 グリッドに位置し、III層上面で検出された。 重複 D-2より古く、D-4、P-52・63・65・83・90より新しい。 形状・規模 東から西（N-88°-E）に走行し、検出長3.72m、幅0.41～0.61m、深さ0.13mを測る。断面形状は逆台形状、底面は平坦で、底面標高は106.50m前後である。 遺物 肥前産磁器のくらわんか碗（46）と京・信楽産陶器の小壺（47）を図示したほか、陶磁器・須恵器・土師器の破片が出土している。 時期 江戸時代。出土遺物とD-2より古いことから18世紀後半以降と考えられる。

W-4号溝跡（巻頭図版3 第12・22図 第8・12・16表 PL.6）

位置 -G・-H-51 グリッドに位置し、IIIb層上面で検出された。 重複 X-1・2より古く、H-1・2、D-11、P-66・91・99・105・106・203、W-5より新しい。 形状・規模 西から東（N-74°-W）に走行し、検出長4.19m、幅0.72～0.78m、深さ0.37～0.41mを測る。断面形状は階段状、底面は西から東へ傾斜しており、底面標高は西端で106.41m、東端で106.20mである。 遺物 濑戸・美濃産陶器の志野皿（48）と酒井氏時代の軒丸瓦（49）を図示したほか、陶磁器・須恵器・土師器の破片が出土している。 時期 江戸時代。 IIIb層から掘り込まれているため、18世紀中葉以降と考えられる。

W-5号溝跡（第12・22図 第8・12・16表 PL.2・6）

位置 -G-50・51 グリッドに位置し、IIIf層上面で検出されIIId層に被覆されていた。 重複 P-66・133、W-4、X-1・2より古く、H-1・2、P-73・105・119、X-3より新しい。 形状・規模 北西から南東（N-38°-W）に走行し、検出長4.38m、幅2.35m以上、深さ0.84～0.93mを測る。断面形状は階段状、底面は北西から南東へ傾斜している可能性があり、底面標高は北西端で105.63m、南東端で105.56mである。

遺物 漆器の椀（50）と礎石に転用された五輪塔の地輪（51）を図示したほか、陶器・カワラケ・須恵器・土師器・埴輪の破片が出土している。 時期 江戸時代。出土遺物・重複関係から17世紀前半に遡る可能性がある。

W-6号溝跡（第9・22図 第8・12・16表 PL.1・6）

位置 -F・-G-42 グリッドに位置し、A-1構築土層上面で検出された。 重複 P-180・181・185・191・197、A-1より新しい。 形状・規模 東から西（N-80°-E）に走行し、検出長3.72m、幅0.53～0.72m、深さ0.21mを測る。断面形状は逆台形状、底面は平坦で、底面標高は106.21mである。 遺物 濑戸・美濃産陶器の花瓶（52）を図示したほか、陶器・培培・硯・近世瓦・須恵器・土師器の破片が出土している。 時期 江戸時代。 A-1より新しいことから18世紀以降であると考えられる。

W-7号溝跡（第6～9図 第8・12表 PL.1・2）

位置 -G-43～45・48・49、-H-50 グリッドに位置し、IV層上面で検出されIIId層に被覆されていた。 重複 D-1～4、P-4・9・15・16・20・40・58・59・74・81・94・129・155～157・159・187・199・204、W-1・9～11、X-4より古く、P-147より新しい。 形状・規模 北から南（N-4°-W）に走行し、検出長27.77m、幅0.36～0.67m、深さ0.09～0.20mを測る。断面形状は逆台形状、底面は北から

南に傾斜しており、底面標高は北端で 106.40m、南端で 106.29m である。 遺物 陶器・内耳鍋・須恵器・土師器・古瓦の破片が出土している。 時期 江戸時代以前。近世整地層（III層）が平坦ではないことから陶器と内耳鍋の破片（各 1 点）を混入と仮定すると、その他の出土遺物と自然科学分析の結果から 10 世紀以降 1108 年以前と考えられる。

W-8 号溝跡（第 6 図 第 8 表 PL. 2）

位置 -G-50 グリッドに位置し、IIIf 層上面で検出され IIIe 層に被覆されていた。 重複 P-37・104、W-1 より古く、D-6 より新しい。 形状・規模 東から西 (N-86°-E) に走行し、検出長 2.26m、幅 0.15 ~ 0.23m、深さ 0.12m を測る。断面形状は弧状、底面は平坦で、底面標高は 106.32m 前後である。 遺物 出土していない。 時期 江戸時代。重複関係から 18 世紀以前と考えられる。

W-9 号溝跡（第 7 図 第 8 表 PL. 2）

位置 -G-48・49 グリッドに位置し、IV 層上面で検出されたが調査区西壁の土層断面によって IIId 層上面から掘り込まれていることが確認できた。 重複 P-4・21・55・56・67・74・92・93・102・107 ~ 109 より古く、W-7 より新しい。 形状・規模 南西から北東 (N-69°-E) に走行し、検出長 4.12m、調査区西壁の土層断面で幅 1.09m、深さ 0.41m を測る。断面形状は逆台形状、底面は南西から北東に傾斜しており、底面標高は西端で 106.29m、東端で 106.20m である。 遺物 出土していない。 時期 江戸時代。 IIId 層上面から掘り込まれているため、18 世紀中葉以降と考えられる。

W-10 号溝跡（巻頭図版 2・3 第 13・22・23 図 第 8・12・13・16 表 PL. 1・3・6）

位置 -F・-G-43 グリッドに位置し、A-1 構築土層中に検出された。 重複 P-158・194 より古く、A-1 と同時期、P-199、I-2、W-7 より新しい。 形状・規模 西から東 (N-83°-E) に走行し、検出長 5.07m、幅 0.72 ~ 0.90m、深さ 0.54m を測る。断面形状は逆台形状、両側壁が石組みの側溝である。底面は西から東に僅かに傾斜しており、底面標高は西端で 105.87m、東端で 105.82m である。 石組 自然石の野面積であり、南側は 2 段、北側は 3 ~ 4 段の築石が残存していた。南壁は比較的大型で同規格の築石が多少目地を揃えて積まれているが、北壁は南壁に比べると小型で規格も不統一な築石が積まれている。覆土上層から多量に出土した自然石は石組上部から崩落した築石と考えられ、併存していた A-1 との高低差から崩落したのは 1・2 段程度と推定される。 掘り方 幅は 1.90 ~ 2.37m を測り、裏込め石はほとんど含まれていない。A-1 の 4 層に被覆され、5 層を掘り込んでいる。 遺物 多量の遺物が出土し、その大半は粗砂主体である 1 層に含まれていた。肥前窯磁器のくらわんか碗（53）、広東碗（54）、段重（55）、京・信楽産陶器の小杉茶碗（56）、焰燭（57）、焼塙壺（58）、さな（59）、煙管（60）、石組みに使用されていた板（61・62）を図示したほか、陶磁器・中近世の土器類・近世瓦・木材・煙管・ガラス製品・灰釉陶器・須恵器・土師器・土製品・古瓦の破片が出土している。 時期 江戸時代。 1 層から型紙絵付の磁器破片が出土していることから埋没は明治 15 年以降と考えられる。

（7）再築前橋城三の丸外堀跡

再築前橋城三の丸外堀跡（W-11）が、調査区中央部を横断して検出された。

W-11 号堀跡（巻頭図版 1 第 7・14 ~ 16・23・24 図 第 8・13・16・17 表 PL. 4・6・7）

位置 -G-45 ~ 48 グリッドに位置し、IIia 層上面で検出された。 重複 P-200・201、W-7 より新しい。 形状・規模 東から西 (N-86°-E) に走行し、検出長 5.05m、幅 11.32m、深さ 1.84 ~ 1.95m を測る。断面形状は階段状、底面は中央部がやや高く、底面標高は中央で 104.50m、南端で 104.41m である。三の丸側のみ石垣が構築されている。 石垣 自然石を積み上げた野面積乱積である。築石・根石は、控え長が小口幅より長いものと短いものが混在していた。上段の築石は崩落し裏込めが露出していたが、本来は 5 段以上積まれていたと推定される。胴木継ぎ目の上位に 4 段残存していた石垣は縦目地を概ね通して積まれており、根石を除き築

石は全て削り面を小口としていた。最上部の築石は控え長が70cm程度あり、検出した築石・根石のなかで最も長かった。松材の胴木(73)は、長さ393.2cmであり手斧で平坦にした加工面を下にして設置されていた。小口側に胴木を固定するように20~30cm程度の間隔でこぶし大から人頭大の河原石が置かれていた。石垣解体後築石・根石10点を洗浄した結果、墨書きがあるものが8点(65~72)確認された。65は、石尻に「八月卯ノ六 八人遣」と記されていた。66は小口に「十一人口」と記されており、唯一石垣解体前に墨書きを確認することができた。その他の築石・根石は、石尻や控えに「△」の記号が記されていた。土壘(土居) 堀北方の調査区東壁に南北幅5.51mの範囲で、II・III層間に10cm程度の高さで残存していたにぶい黄褐色土は、土壘の基部が残存していたものであったと考えられる。土壘の構築土は堀の覆土1層と近似しており、表土除去の際に調査区東壁から西側へ2m程度の範囲で残存しているのを確認した。掘り方 掘り方の幅は12.96mを測り、石垣部の底面は一段掘り込まれていた。遺物 瀬戸・美濃産陶器の片口鉢(63・64)を図示したほか、陶磁器・火鉢・近世瓦・須恵器・土師器の破片が出土している。時期 文久三年(1863)から元治元年(1864)の間に開削され、明治25年(1892)以前には埋められていた。

(8) 道路状遺構

W-10南方で調査区壁の全断面に確認された硬化面を含む版築状の堆積を、道路状遺構(A-1)とし報告する。第VII章で後述するが、A-1は古地図に描かれている酒井氏時代から再築前橋域まで存在する「十人小路」であると考えられる。

A-1号道路状遺構(第9図 第9・13表 PL.1)

位置 -F-42・43、-G-42・43グリッドに位置し、IV層上面に構築されII層に被覆されていた。重複 P-123・124、W-6より古く、W-10と同時期、D-8・9、P-135~145・168~180・182~186・188~191・195・196・205、I-2より新しい。形状・規模 東から西(N-83°-E)に走行し、検出長5.10m、幅8.50m以上を測る。上層断面からA-1は補修を繰り返しながら長期間使用されていたと考えられる。調査区壁で確認できた最上面は標高106.73m、最も硬化している3層上面は標高106.40~106.53m、路盤直下の地山標高は106.05~106.34mである。遺物 陶磁器・近世瓦・土壁の可能性がある不明遺物と灰釉陶器・須恵器の破片が出土している。陶磁器には、18世紀代のものが確認できる。時期 江戸時代。

(9) 瓦だまり

瓦だまりは2ヶ所(X-1・2)検出され、時期は両者ともに18世紀以降であると考えられる。

X-1号瓦だまり(第16・24図 第10・13・17表 PL.4・7)

位置 -G-50・51グリッドに位置し、III層上面で検出され土坑状の掘り込みに瓦片が多量に投棄されていた。重複 H-2、P-72・99・105・113・118、W-1・4・5より新しい。形状・規模 掘り込みの平面形状は円形、断面形状は逆台形状で、長軸2.49m、短軸2.11m、深さ0.25mを測る。底面は平坦で、底面標高は106.46m前後である。底面からはピットが8基検出されたが、このうちの1基は覆土中から掘り込まれていた。

遺物 近世瓦は軒桟瓦1点、丸瓦2点、棟瓦23点、廻瓦49点、棟瓦が平瓦123点、不明123点、総数321点、総重量24,172.21gが出土し、松平氏時代以降の軒桟瓦(74)を図示した。このほか、陶磁器・焰烙・カワラケ・粗粒輝石安山岩の加工された切石と灰釉陶器・須恵器・土師器・古瓦の破片が出土している。時期 江戸時代。出土遺物から19世紀以降と考えられる。

X-2号瓦だまり(第16・24図 第10・13・17表 PL.7)

位置 -G・-H-51グリッドに位置し、大部分が調査区外となる。調査区北・西壁の掘り込みに瓦片が多数突き刺さった状態で検出された。重複 H-1、D-11、P-203、W-4・5より新しい。形状・規模 掘り込

みの平面形状は不明、断面形状は逆台形状で、長軸 2.70m 以上、短軸 0.67m 以上、深さ 0.28m を測る。底面は平坦であると推定され、底面標高は 106.46m 前後である。 遺物 近世瓦は軒棟瓦 1 点、棟瓦 7 点、斯瓦 1 点、総数 9 点、総重量 940.33 g が出土し、松平氏時代以降の軒棟瓦（75）を図示した。遺物は壁の崩落を避けるため全ては取上げていない。 時期 江戸時代。出土遺物から 19 世紀以降と考えられる。

（10）性格不明遺構

性格不明遺構は 2 基（X-3・4）検出され、時期は X-3 が平安時代以降、X-4 が江戸時代である。

X-3 号性格不明遺構（第 6・24 図 第 10・17 表 PL.7）

位置 -G-50・51 グリッドに位置し、IV 層上面で検出され W-5 に大部分が破壊されている。 重複 P-73・119・133、W-5 より古い。 形状・規模 平面・断面形状は不明で、長軸 1.27m 以上、短軸 0.87m 以上、深さ 0.41m を測る。調査区壁で確認する限り底面は南から北へ傾斜しており、最も低い底面標高は 105.81m である。 遺物 須恵器の坏（76）を図示した。 時期 遺物から 9 世紀前半以降と考えられる。

X-4 号性格不明遺構（第 17 図 第 10 表 PL.4）

位置 -G-44 グリッドに位置し、IV 層上面で検出された。 重複 W-7 より新しい。 形状・規模 敷石を伴う遺構であり、平面形状は方形ないし長方形が推定され、長軸方向 N8°E、長軸 2.77m 以上、短軸 1.27m 以上を測る。敷石上面の標高は 106.44m であり、壁際に 30 ~ 40cm 程度の平坦な自然石が配され、中央部に 10 ~ 20cm 程度の自然石が 2 段程度で敷き詰められている。掘り方は断面形状が逆台形状、深さ 0.26m、底面標高は 106.17m 前後である。 遺物 出土していない。 時期 近世以降。

第 2 節 遺物

（1）古代以前の遺物

遺構覆土及び近世整地層（III 層）・表土から、灰釉陶器 33 点、須恵器 175 点、内面黒色土器 1 点、土師器 307 点、瓦 17 点、鉄滓 3 点、埴輪 3 点、石器 5 点が出土している。

縄文時代の遺物 H-1 の掘り方から打製石斧が 1 点、P-3 の覆土から敲き石が 1 点、近世整地層（III 層）から磨石・台石が各 1 点出土している。

古墳時代の遺物 土器は、古墳時代後期の可能性がある土師器の小片が少量みられるほか、D-8 からは赤彩の施された壺と考えられる小片 1 点が出土している。埴輪は P-29・133、W-5 から小破片各 1 点と W-10 から埴輪の可能性のある小破片 1 点が出土している。W-5 の埴輪は円筒埴輪の凸帯部が残存している。石器は、近世整地層（III 層）からも編み石が 1 点出土している。

古代の遺物 土器は 9 世紀後半から 10 世紀代のものが多く、本調査区における当期の集落の存在が示唆される。古代の瓦は、総重量 2,595.35 g、凸面には繩タタキやナデが施され、凹面には布目痕がある。凹面に糸切痕があるものと粘土紐の接合痕があるものから、粘土板巻きつけ技法と粘土紐巻きつけ技法で作られた瓦がある。須恵器の稜碗（26）と小型短頸壺（37）、古瓦など古代の仏教関連の遺物が出土していることは注目される。鉄滓は、H-2 の掘り方から 1 点出土していることから古代の遺物として判断した。

（2）磁器

産地・器種 総数 408 点である。肥前産 366 点（90%、推定 2 点含む）、瀬戸・美濃産 39 点（9%）、中国産 2 点（明代、1%未満）、推定九谷産 1 点（1%未満）が出土しており、数量は 18 世紀代の肥前産が最も多い。器種は碗 226 点（55%）、皿 57 点（14%）、小壺 32 点（8%）、徳利 27 点（7%）、壺 16 点（4%）、鉢 13 点（3%）、

猪口 10 点 (2 %)、碗蓋 7 点 (2 %)、水滴・香炉各 4 点 (各 1 %)、段重 3 点 (1 %)、合子・合子蓋・蓋物蓋・仏供具・瓶各 1 点 (各 1 % 以下)、不明 4 点があり、碗・皿・小坪・壺以外の器種は、全て肥前産である。

碗 肥前産 198 点 (推定 1 点含む)、瀬戸・美濃産 28 点が出土しており、肥前産の碗は 17 世紀後半の三角高台碗、17 世紀末から 18 世紀代の丸碗 (5・77・78 他)、18 世紀代の青磁染付碗・青磁染付丸碗 (80 他)・ぐらわんか碗 (46・53 他)・陶胎染付碗・腰張碗、18 世紀後半から 19 世紀初頭の筒茶碗・小丸碗・ハの字高台碗・小広東碗、18 世紀後半から 19 世紀中葉の広東碗 (54 他)・半球碗 (79 他) がある。瀬戸・美濃産には 19 世紀代の端反碗や 19 世紀前半の広東碗、19 世紀前半から中葉の湯呑み碗や 19 世紀後半の稚兒茶碗がある。

皿 肥前産 53 点 (推定 1 点含む)、瀬戸・美濃産 2 点、明代の中国産 2 点が出土している。明代の皿 (29)、肥前産皿 (28・81)・深皿 (30) を図示したほか、肥前産染付輪皿 (1650 年代～1770 年代)、蛇ノ目凹形高台付皿 (1740 年代～1840 年代) などがある。小坪 肥前産 31 点、推定九谷産 1 点である。徳利 27 点のうち、3 点は爛徳利、1 点は御神酒徳利である。壺 瀬戸・美濃産 9 点、肥前産 7 点があり、白磁・青磁壺や小壺も出土している。その他 古九谷様式と考えられる肥前産の蓋物蓋 (37)、肥前産の段重 (55) を図示した。

(3) 陶器

產地・器種 総数 490 点である。瀬戸・美濃産 173 点 (35%)、京・信楽産 70 点 (14%、推定 1 点含む)、肥前産 70 点 (14%)、常滑産 14 点 (3%、推定 4 点含む)、丹波産 7 点、堺産 6 点、渥美産 6 点、信楽産 6 点 (推定 1 点含む)、萬古産 4 点、志戸呂産 3 点、備前産 2 点 (推定 1 点含む)、古瀬戸産 2 点 (推定 1 点含む)、萩産 1 点、推定笠間産 1 点、不明 125 点が出土している。器種は碗 161 点 (33%)、壺 45 点 (9%、4 点は壺の可能性もある)、徳利 36 点 (7%)、土瓶 33 点 (7%)、皿・鍋類各 28 点 (6%)、鉢・壺各 27 点 (6%)、擂鉢 26 点 (5%)、燈火皿類 9 点 (2%)、急須・鍋蓋・土管各 5 点、香炉 4 点、灰落とし・焜炉各 3 点、小坪・水盤・土瓶蓋各 2 点、盤・鳥餌入れ・蓋・水滴 (推定)・瓶水入れ・花瓶各 1 点、不明 33 点がある。中世陶器 中世と判断できる陶器片は 16 点あり、常滑産の甕 7 点 (推定 2 点含む)、渥美産 (12 世紀後半～13 世紀前半) の甕 6 点、古瀬戸産の盤 1 点、古瀬戸産の可能性がある壺 1 点、瀬戸・美濃産の灰釉皿 1 点が出土している。

碗 肥前産 65 点、瀬戸・美濃産 50 点、京・信楽産 43 点、萩産 1 点、产地不明 2 点が出土しており、全体的に時期が 18 世紀代のものが多い。肥前産の呉器手碗 (32)・京焼風陶器碗 (11・86)、瀬戸・美濃産の天目茶碗 (14・45)・白天目茶碗 (21)・尾呂茶碗 (83・84)・長石袖の碗 (24)、京・信楽産の色絵半球碗 (10)・小杉茶碗 (56) を図示した。肥前産の碗は京焼風陶器碗が 38 点と出土数が多いほか、京焼風陶器平碗・呉器手碗・雜巾掛け碗・刷毛目碗が出土しており、何れも時期は 17 世紀後半から 18 世紀中葉におさまる。瀬戸・美濃産の碗は 17 世紀代の天目茶碗や白天目茶碗など、17 世紀後半から 18 世紀前半の尾呂茶碗・刷毛目碗、18 世紀代の色絵半球碗やせんじ碗・腰錆小腹などが出土している。種類は豊富だが、突出して数量の多いものはみられない。京・信楽産の碗は 18 世紀代の色絵・鉄絵・銹絵の半球碗やせんじ碗、18 世紀代から 19 世紀前半の灰釉端反碗や小杉茶碗などが出土しており、なかでも色絵半球碗が 17 点と比較的数量が多い。皿 肥前産が 2 点出土しているが他は全て瀬戸・美濃産であり、16・17 世紀代の灰釉丸皿や 17 世紀前半から中葉の志野皿 (48 他)、17 世紀後半から 18 世紀前半の菊皿 (85)、18 世紀中葉の灰釉輪皿、18 世紀代の摺絵皿などが出土している。

小坪 京・信楽産 (47) と瀬戸・美濃産が出土した。燈火皿類 瀬戸・美濃産の燈火皿 4 点 (推定 1 点含む)・燈火受皿 2 点、志戸呂産燈火受皿 2 点、備前産燈火受皿 1 点 (12) が出土した。鉢 肥前産の三島手鉢・刷毛目鉢、瀬戸・美濃産の煙硝掘の鉢 (27)・手水鉢・片口鉢 (63・64 他) などが出土している。擂鉢 瀬戸・美濃産 14 点 (22・33 他)、丹波産 6 点、堺産 6 点 (42 他) が出土しており、遺存率の良い堺産の個体が出土している (42)。鍋類 瀬戸・美濃産の土鍋 13 点、推定信楽産の土鍋 1 点、产地不明の行平鍋 14 点が出土した。徳利 京・信楽産の爛徳利が 20 点と出土数が多いほか、瀬戸・美濃産のべこかん徳利 9 点、产地不明の

べこかん徳利 3 点、瀬戸・美濃産の爛徳利・二合半徳利・五合徳利各 1 点、推定備前産の徳利が 1 点出土している。瓶頸・壺 瀬戸・美濃産、京・信楽産、信楽産、推定古瀬戸産が出土しているが、過半数が产地不明である。青土瓶や小壺・香油壺が各 1 点出土している。このうち、瀬戸・美濃産の花瓶 (52) を図示した。甕 常滑・信楽・渥美産の焼締めの甕が 24 点と数量が多く、うち 13 点が中世である。このほか、瀬戸・美濃産の半胴甕や水甕が出土している。

(4) 中近世の土器

器種・産地 総数 243 点である。内耳土器 101 点、カワラケ（土師質皿）82 点、火鉢 25 点（推定 7 点含む）、さな 3 点、五徳 3 点（推定 2 点含む）、焼塙壺 2 点、器種不明 27 点が出土した。焼塙壺や五徳では江戸産や関西産が確認できたが、ほかは大半が在地産であると考えられる。内耳土器 101 点出土した。器種は焙烙が 78 点で、他は内耳鍋である。内耳鍋の時期は、15 世紀後半から 16 世紀代におさまる。焙烙は大半が在地産と考えられる平底の焙烙（7・8 他）で、概ね瓦質だがなかには完全に土師質の破片資料もある。丸底の焙烙は W-10 から 5 点（57 他）出土しており、少なくとも 2 個体以上あると考えられ、産地は胎土からみると江戸産ではなくむしろ在地に近い。カワラケ（土師質皿）82 点出土した。時期は 2 点が 15 世紀後半から 16 世紀前半、3 点（推定を 1 点含む）が 16 世紀後半、他は近世と考えられる。その他 火鉢（88・89）、さな（59）、五徳（90）を図示した。火鉢は、器形は平面方形と円形があり瓦質のものが多く、全て破片資料のため煙がや火消壺などの可能性もある。時期は大半が近世であるが、88 は中世と考えられる。さな・五徳は全て土師質であり、90 は江戸産である。焼塙壺については、板作り成形である 43 は関西産、輦輪成形である 58 は江戸産と考えられる。

(5) その他の遺物

近世瓦 総数 416 点、総重量 34,501.45 g であり、軒棟瓦 2 点（74・75、501.37 g）、軒丸瓦 1 点（49、591.77 g）、棟瓦 39 点（5,226.72 g）、丸瓦 15 点（1,706.00 g）、平瓦 3 点（331.08 g）、棟瓦か平瓦 153 点（19,151.56 g）、廻瓦 57 点（推定 3 点含む、5,452.95 g）、重れ付廻瓦 1 点（312.74 g）、不明 145 点（1,227.26 g）がある。このうち 321 点、重量 24,172.21 g（数量比 77%、重量比 70%）が X-1 から出土している。

漆器 梱（50）のほか、P-133 から赤漆小片が出土している。木製品・木材 D-4 から曲げ物底板 1 点（17）、I-2 から曲げ物底板 2 点（40 他）、竹筒 1 点（41）、棒状製品 1 点、P-161、I-2、W-10・11 から杭や木材、P-129・192・193 から柱根（38・39 他）が出土している。金属製品 D-1 と W-10 から煙管の雁首 2 点（9・60）、D-1 と表土から棒状製品 5 点が出土している。石製品 宝篋印塔（18）、五輪塔地輪（51）のほか、硯 2 点（25 他）、砥石 1 点、切石加工品 1 点が出土している。その他 盆台の可能性がある土製品（6）、不明土製品 1 点、寛永通宝 2 点、ガラス製の乳棒 1 点と不明製品 1 点が出土している。動物遺体は、D-4 から獸骨が、I-2 から人骨の可能性がある頭骨が出土している。

第2表 竪穴住居(H) 観察表

番号	グリッド	標記面	平面形状	方向	範囲(m)				底面 (m)	底面標高 (m)	底面 位置	周囲 遺物 番号	周囲出土遺物(点)	直面開示
					長軸	短軸	深さ	振り方						
1	G-H-51	IV	方形か 長方形	N-S-W	(2.11)	(2.20)	0.24	0.06 ~ 0.18	(2.53)	106.16	不明	1	直面留6, 土面留5, 打削6, 平1	D-11-P-203, W-4-5, N-2より古く。 H-2より新しい。
2	G-51	IV	方形か 長方形	N-S-E	(2.10)	(2.21)	0.15	0.05 ~ 0.24	(2.64)	106.20	不明	2 ~ 4	鉄鋤1	H-1-D-11-P-00-105-106, W-4-5-N-1より古い。

第3表 土坑(D) 観察表

番号	グリッド	標記面	平面形状	剖面 形状	範囲(m)				底面 (m)	底面標高 (m)	底面 方向	周囲 遺物 番号	周囲出土遺物(点)	直面開示
					長軸	短軸	深さ	振り方						
1	G-49-50	IIIb	(円形)	(風状)	(2.75)	(1.69)	0.45	106.25	—	5 ~ 9	直面留7	直面留8, 土面留5, 石器2	D-2-P-30-47-50-85-96, W-2より古く。 D-3-A-P-87-88, W-2より新しい。	
2	G-H-49	IIIb	(円形)	風状	(1.08)	(0.90)	0.58	106.04	—	10 ~ 13	直面留7	風面留2, 土面留5, 石器1	D-1-P-4-P-8-2-03-05, W-3より古く。	
3	G-49-50	D-4	平窓	(風状)	(2.66)	(0.38)	0.57	105.86	—	—	直面留4	風面留1, 土面留4, 土面留4	D-1-P-3-P-85-W-2より古く。 D-3-P-7 2を削る。	
4	G-49-50	IV	(方形)	風状	(3.02)	(1.92)	0.98	105.32	N-4'-W	14 ~ 17	直面留7	—	D-1-P-30-47-50-51-85 ~ 89-103, W-1-2-3 より古く。P-131, W-1より新しい。	
5	G-50	III	(扇形)	風状	(1.28)	0.53	0.25	106.25	N-86'-E	—	—	—	P-46-53-68-133, W-1より古く。 D-6より削る。	—
6	G-50	IV	(扇形)	風状	(0.92)	(0.40)	0.18	106.21	N-86'-W	—	—	—	D-5-P-46-53-68+133, W-1-Wより古く。	—
7	G-48	III	楕円形	風状	1.10	0.78	0.20	106.40	N-5'-W	—	直面留4, 土面留10, 洋鉢2	直面留4, 土面留4, 洋鉢2	P-34より古く。P-14-18より新しい。	
8	G-42	IV	楕円形	風状	1.21	0.55	0.28	106.08	N-79'-E	18	—	直面留2, 土面留2	A-1より古く。	
9	G-42	IV	楕円形	風状	1.20	0.86	0.20	106.07	N-79'-W	—	—	—	A-1より古く。	
10	G-50	III	(円形)	小窓	(0.56)	(0.50)	0.10	106.28	—	—	—	—	W-1より削る。	
11	G-51	III	(扇形)	小窓	(2.15)	(0.73)	—	—	N-86'-W	—	—	—	W-5, W-2より古く。H-1-P-28-29-203より新しい。	

第4表 ピット(P) 観察表(1)

番号	グリッド	遺構	標記面	平面形状	剖面 形状	範囲(m)				底面 (m)	底面標高 (m)	底面 方向	周囲 遺物 番号	周囲出土遺物(点)	直面開示	
						長軸	短軸	深さ	振り方							
1	G-49	B-1	II	楕円形	V字状	0.55	0.45	0.68	105.94	—	—	—	—	—	P-17	
2	G-49	—	II	円形	斜面	0.49	0.41	0.40	106.21	2	—	—	—	—	—	
3	G-48-49	B-1	II	四角形	通台状	0.73	0.65	0.72	105.91	3	下, 斜	21 ~ 23	—	—	P-120	
4	G-48-49	B-1	II	四角形	斜面	0.63	0.52	0.69	105.98	—	—	—	—	—	P-6	
5	G-48	—	II	四角形	斜面	0.35	0.28	0.60	105.97	3	—	—	—	—	P-5	
6	G-48	—	II	(扇形)	斜面	0.45	0.40	0.43	106.17	3	—	—	—	—	—	
7	G-48	B-1	II	四角形	通台状	0.52	0.46	0.42	106.15	2	—	—	—	—	—	
8	G-48	—	II	四角形	通台状	0.57	0.51	0.53	106.02	2	—	—	—	—	—	
9	G-49-49	B-2	IIIb	(扇形)	通台状	0.50	0.45	0.68	106.01	3	斜	—	—	—	W-7	
10	G-49	—	II	四角形	斜面	0.55	0.37	0.59	106.09	2	—	24	直面留	—	P-57	
11	G-49	—	II	四角形	斜面	0.55	0.37	0.59	106.09	2	—	—	—	—	—	
12	G-49	—	II	円形	通台状	0.57	0.51	0.77	105.79	3	右斜	—	—	—	P-110	
13	G-49	B-1	II	方形	斜面	0.58	0.57	0.41	106.15	2	—	—	—	—	P-24	
14	G-49	—	II	円形	斜面	0.34	0.30	0.25	106.35	—	—	—	—	—	D-7	
15	G-49	—	II	円形	U字状	0.64	0.56	0.73	105.85	3	—	—	—	—	P-16, W-7	
16	G-49	B-1	II	(円形)	斜面	0.67	0.47	0.43	106.11	2	—	—	—	—	P-15	
17	G-49	—	II	(扇形)	通台状	0.28	0.30	0.41	106.21	—	—	—	—	—	P-1	
18	G-49	—	II	椭円形	斜面	0.43	0.30	0.28	106.27	2	斜	—	—	—	P-19	
19	G-49	—	II	(扇形)	V字状	0.22	0.17	0.28	106.27	—	—	—	—	—	P-18	
20	G-49	—	II	椭円形	斜面	0.57	0.48	0.29	106.29	3	直面	—	—	—	W-7	
21	G-49	—	II	円形	U字状	0.42	0.41	0.79	105.94	—	—	—	—	—	P-21, W-9	
22	G-49	—	II	円形	斜面	0.34	0.27	0.25	106.27	—	—	—	—	—	P-24-44	
23	G-49	—	II	椭円形	U字状	0.29	0.29	0.51	106.05	—	—	—	—	—	—	
24	G-49	—	II	(扇形)	通台状	0.55	0.42	0.48	106.06	2	直面	—	—	—	P-44	
25	G-49	—	II	椭円形	風状	0.35	0.29	0.18	106.41	2	—	—	—	—	P-26	
26	G-49	B-2	II	椭円形	風状	0.41	0.33	0.11	106.52	—	—	—	—	—	P-25	
27	H-50	—	IIIb	(円形)	斜面	(0.36)	(0.15)	0.43	106.28	—	—	—	—	—	P-28	
28	H-50	—	II	円形	U字状	0.36	0.26	0.64	106.00	—	—	—	—	—	D-11, P-27	
29	G-50	—	IV	(方形)	通台状	0.49	0.40	0.21	106.25	—	—	—	—	—	P-45	
30	G-50	B-3	II	(扇形)	風状	(0.47)	0.26	0.13	106.37	2	直面	—	—	—	D-1-4-P-50	
31	G-49	—	II	(扇形)	通台状	(0.64)	0.45	0.20	106.43	—	—	—	—	—	P-32-43	
32	G-49	B-2	II	(円形)	斜面	(0.29)	0.28	0.24	106.38	—	—	—	—	—	P-31	
33	G-49	B-1	II	楕円形	斜面	1.02	0.67	0.57	105.97	4	直面	—	—	—	P-42	
34	G-49	—	II	円形	V字状	(0.22)	0.20	0.32	106.17	—	—	—	—	—	P-7	
35	G-50	—	IIIa	椭円形	U字状	0.38	0.32	0.62	105.83	—	—	—	—	—	P-36	
36	G-49-50	IIIa	II	(扇形)	通台状	0.50	0.27	0.68	106.07	4	直面	—	—	—	P-61	
37	G-49	—	II	円形	斜面	0.36	0.30	0.65	106.27	—	—	—	—	—	P-25	
38	G-49	—	II	円形	U字状	0.33	0.31	0.51	106.14	—	—	—	—	—	W-1	
39	H-50	—	II	(円形)	斜面	(0.24)	0.11	0.37	106.32	—	直面	—	—	—	P-40	
40	H-50	W-7	II	(扇形)	斜面	(0.47)	0.21	0.77	105.86	—	—	—	—	—	P-39	
41	G-49	—	II	円形	通台状	0.46	0.45	0.25	106.24	2	直面	—	—	—	P-33	
42	G-49	V	II	円形	通台状	0.26	0.27	0.72	105.78	—	—	—	—	—	P-33	
43	G-49	—	II	(扇形)	通台状	(0.39)	0.33	0.24	106.37	—	—	—	—	—	P-23	
44	G-49	—	II	(扇形)	U字状	0.47	0.27	0.68	106.07	—	—	—	—	—	P-23-24	
45	G-50	B-4	IV	(円形)	U字状	0.27	0.26	0.40	106.07	—	—	—	—	—	P-29	
46	G-50	—	IIIe	U字状	0.24	—	0.25	106.30	—	—	—	—	—	—	D-5-6	
47	G-49	B-2	II	(楕円形)	風状	0.79	—	0.25	106.25	—	—	—	—	—	(D-1-P-51-87-88)	
48	G-50	—	IV	円形	通台状	0.35	0.30	0.44	105.95	—	—	—	—	—	W-1	
49	H-50-51	—	IV	円形	通台状	0.30	0.25	0.33	106.01	4	直面	—	—	—	D-1-P-7-88	
50	G-50	D-1	II	(扇形)	風状	(0.85)	0.68	0.80	105.67	4	直面	—	—	—	P-30, W-1-2	
51	G-49	—	D-4	II	楕円形	扁牛状	0.40	0.33	(0.54)	105.99	2	—	—	—	—	P-47

第12表 中近世遺物集計表(2)

通路 番号	種別	器種・部位	点数	組数	產地	年代・調査
D-4	陶器	天日井網	1		■■■■■	美濃
		盃	4		不明	16世紀前半～17世紀後半
		盃	—		D+2, 4, 5, 1, 1	近世中期頃結合
		盃	—		D+1と接合	
		壺(地縫の)	1	II	切妻	
		壺(地縫の)	1		茶漬	中世
		壺(地縫の)	2		茎足?	中世
		壺(地縫の)	1		脚	12世紀後半～13世紀初半
		不明	1		不明	12世紀後半～13世紀初半
		土器	ガラクタ	1	在施	15世紀後半～16世紀初半
P-2	木製品	木製(板)	1		在施	近世
		動物造形	3		在施	近世
		天日井網	2		在施	近世
	石製品	石製(板)	1		在施	近世
		石製(網)	1		在施	近世
		石製	4		不明	17世紀前半～18世紀後半
P-3	陶器	天日井網	1		■■■■■	美濃
		壺(地縫の)	1		1620年代～1650年代	
		土器	ガラクタ	2	在施	1500年代～1610年代初期
		壺(地縫の)	1		不明	17世紀前半～18世紀後半
		内耳縫	1	2	在施	15世紀後半～16世紀
		内耳縫	1	—	在施	近世
P-5	P-5・6	内耳縫	1	—	在施	近世
		陶器	不明	1	在施	17世紀前半～18世紀後半
		内耳縫	1	—	在施	近世
	P-7	陶器	不明	1	在施	近世
		陶器	明	—	不明	17世紀前半～18世紀後半
		近世瓦	1	—	150.98kg	
P-10	陶器	せんべい	1		■■■■■	美濃
		鉢丸久	1	4	■■■■■	美濃
		壺	1		■■■■■	美濃
		不明	1		■■■■■	美濃
		土器	ガラクタ	1	在施	近世
		陶器	明	—	不明	17世紀前半～18世紀後半
P-11	P-11	土器	ガラクタ	1	—	1730年代～1770年代
		天日井網	1		■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
P-12	P-12	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
P-13	P-13	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
I-2	I-2	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-1	W-1	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-2	W-2	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-3	W-3	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-4	W-4	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-5	W-5	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-6	W-6	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-7	W-7	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
W-10	W-10	内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃
		内耳縫	1	—	■■■■■	美濃

第14表 中近世遺物集計表(4)

遺物 番号	種別	器種・部品	点数	組数	產地	年代・調考
近世 整地類 (壁面)	陶器	罐	1		豆・仙臺	
		瓦瓶丸頭	1		美濃	16世紀代
		瓦瓶	1		繩文・美濃	1600年代～1660年代
		瓦瓶	1		繩文・美濃	1670年代～1740年代
		瓦瓶丸頭	1		繩文・美濃	1730年代～1770年代
		罐	1		繩文・美濃	
		瓦瓶	1		繩文・美濃	
		瓦瓶	1		繩文・美濃	
		瓦瓶	3		丹波	17世紀代
		水滴瓶?	1		不明	近代
		瓶	1		古墳	中世
	陶器	二口瓦瓶	1		豆・仙臺	
		陶器	1		繩文・美濃	
		罐	1		繩文・美濃	中世?
		瓶	1		不明	
		瓶	1		D-2・4、W-1、近世帶輪錐合	
		瓶	1		豆	
		瓶	3		灰茶	12世紀後半～13世紀前半
		瓶	1		家原	中世
		瓶	1		不明	
		不明	2		不明	
近世 整地類 (壁面)	土器	内輪	1		在地	15世紀末～16世紀前半
		内輪	3		在地	15世紀前半～16世紀
		輪形	2		在地	
		切端	17		在地	
		火鉢	1		在地	
		火鉢	4		在地	
		火鉢?	1		在地	
		瓦瓶	1		江戸	
		瓦リカワ	5		在地	17世紀前半～幕末
		瓦リカワ	8		在地	道代
		不明	3		在地	
		不明	1		不明	
		不明	1		不明	
		手拭	1		豆	
近世 瓦質	土器	手拭解瓦	1		—	312.7kg
		瓦	1		—	69.6kg
		瓦瓦か	3		—	231.4kg
		手拭	1		—	13.7kg
		瓦質	1		—	
		瓦石器	1		—	
表上 表下	土器	丸瓶	7		美濃	1700年代～1860年代
		丸瓶	3		美濃	1710年代～1800年代
		瓶	1		美濃	1740年代～1780年代
		丸瓶	3		美濃	1760年代～1810年代
		丸瓶	3		美濃	1760年代～1810年代
		丸瓶	32		美濃	18世紀代
		ゴム形丸付瓶	1		美濃	1820年代初期
		陶片付丸瓶	9		美濃	
		丸瓶	8		美濃	
		瓦石	1		繩文・美濃	1820年代～1860年代
		瓦石	4		繩文・美濃	1840年代～1850年代
		瓦	5		繩文・美濃	近代
		瓦瓶丸頭	2		繩文	1650年代～1770年代
表上 表下	土器	瓦片付瓦片付瓶	1		美濃	1740年代～1840年代
		瓶	1		美濃?	17世紀代
		瓶	7		美濃	
		小瓶	1		美濃	
		摩耶小瓶	1		繩文・美濃	19世紀前半
		小瓶	8		美濃	
		小瓶	1		美濃?	
		小瓶	1		美濃	18世紀代
		小瓶	3		美濃	19世紀前半
		小瓶?	1		美濃	
表上 表下	土器	瓶	1		美濃	
		瓦瓶?	1		美濃	近代
		瓦片付	2		美濃	
		瓦瓶	1		美濃	
		瓦瓶	1		美濃	
		瓦瓶	1		美濃	
		瓦瓶	1		美濃	
		瓦瓶	1		美濃	
		瓦瓶	1		美濃	
		瓦瓶	1		美濃	
表上 表下	土器	瓦瓶	4		美濃	
		瓦瓶	4		美濃	
		瓦瓶	2		美濃	
		火鉢	6		美濃	
		火鉢	6		美濃	
		火鉢?	1		美濃	
		火鉢?	1		美濃	
		瓦リカワ	8		在地	17世紀前半～幕末
		瓦リカワ	8		在地	道代
		不明	10		不明	
表上 表下	土器	丸瓶	4		—	247.7kg
		平瓶	2		—	199.2kg
		瓦瓶	1		—	144.3kg
		瓦瓶か平瓶	15		—	2,501.9kg
		解瓦	3		—	77.5kg
		不明	11		—	149.3kg
		金屬製品	4		—	
		金銀	1		—	
		資本金	1		—	
		資本金	1		—	

第15表 遺物觀察表(1)

()は推定値、()は現存値

番号	出土遺物 部位	相 同 類 型	法量 (cm・g)				残存	色調 模様	鉄土 (鉄土色/含鉄物)	特徴 調整 天端 壁面 等
			口径	直径	高さ	最大径				
1	H-1 鐵土	黑漆器 椀	(3.7)	6.7	5.2	—	1/2	黄白色 中や不良	ロクロ成型(右)、鉄部未切削 高台鋸り付け	
2	H-1・2 鐵土	土漆器 杯	12.0	6.0	3.5	—	3/4	黄白色 中や不良	白粉・真石 灰或白	ロクロ成型、鉄部未切削
3	H-2 鐵土	土漆器 壺	(8.5)	—	(5.8)	—	破片	棕色 良好	赤粉・真石 墨或白	口縁部タコザマ、外周全体ハラケズリ
4	H-2 壺9方	瓦 丸瓦	(6.7)	6.9	1.1	246.72	破片	黄白色 中や不良	砂付・真石 墨或白	瓦基式、凸面ケリズ、底端・側面部ケリズ、四面布目模
5	D-1 鐵土	漆器 碗	10.4	4.6	6.4	—	1/2以上	—	白色 空模	ロクロ成型、豪華、四方形竹格文 模様、1600年代～1720年代
6	D-1 鐵土	土製器 盃台?	2.5	—	(3.0)	(3.6)	1/2以上	—	褐色灰 玻璃	ロクロ成型、無地、赤色彩绘、外周下部朱色刷か れ地・生地時代
7	D-1 鐵土	内面土漆 瓶	(3.6)	(0.8)	5.1	—	破片	内面灰黑色 内面褐灰色 中や不良	白粉・真石 灰或白	瓦基、細縁ロクロ成型、外周下部押捺痕、 底部平底・塑合り・縦目
8	D-1 鐵土	内耳付 壺	(6.8)	(4.4)	5.6	—	破片	外周灰黑色 内面に凸面・兩面 中や不良	白粉・真石 灰或白	瓦基、細縁ロクロ成型、外周下部押捺痕、保付痕、 底部平底・塑合り・縦目
9	D-1 鐵土	金銀製品 等	長 5.2	高 2.0	大頭径 1.4	小口径 0.8	完形	—	—	羅山理原、銅製 18世紀
10	D-2 鐵土	陶器 碗 色半干燒	(9.6)	—	(5.8)	—	1/2以下	—	黄白色 玻璃	ロクロ成型、透明窓、真白無地、外側色絵草花文(赤色のみ残存) 灰・信楽、1600年代～1800年代
11	D-2 鐵土	陶器 碗 瓦底風陶器	(11.5)	5.8	7.2	—	1/2以下	—	白色 玻璃	ロクロ成型、無地・透窓、16世紀後半～1740年代
12	D-2 鐵土	陶器 盤 世交支模	—	—	(2.2)	—	破片	—	赤色 玻璃	ロクロ成型、無地・透窓、透窓斜径 横模
13	D-2 鐵土	土漆器 瓶 瓦立タケ	(12.8)	(6.8)	3.0	—	1/4	灰青色的 中や不良	白色粉 墨或白 灰或白	ロクロ成型、鉄部未切削(左)、内面保付着、打羽根模用 方法、16世紀後半
14	D-4 鐵土	陶器 碗 日付文	(12.4)	—	(6.1)	—	破片	—	白灰色 空模	ロクロ成型、鉢形、瓦底・透窓・16世紀後半～17世紀後期
15	D-4 鐵土	陶器 壺	—	—	(6.3)	(24.3)	破片	—	灰色 空模	細縁ロクロ成型、無地・透窓 底地・中空
16	D-4 鐵土	陶器 壺	—	—	(8.9)	—	破片	—	灰色 空模	細縁、無地・透窓、外側平行テクチ 模美、12世紀後半～13世紀初半
17	D-4 鐵土	木製品 動物飼料	瓶 19.3	幅 (10.3)	厚 1.0	—	1/4	—	—	—
18	D-8 鐵土	石製品 安鋼器	溝 (17.2)	幅 (4.1)	重 1,986.31	—	破片	石材 粗粒粉石(安鋼石)	—	陶器部、假草文
19	P-2 鐵土	土漆器 皿 カワラケ	9.0	4.8	1.8	—	1/2	に赤い縁色 良好	砂付・褐色 角窓	ロクロ成型、鉄部未切削(左) 底地、17世紀前半～暮末
20	P-2 鐵土	土漆器 皿 カワラケ	(10.0)	(6.1)	2.0	—	1/4	に赤い縁色 中や良好	褐色粉・角窓	ロクロ成型、鉄部未切削(左) 底地、17世紀前半～暮末
21	P-3 鐵土	陶器 碗 白目系繩	(10.4)	—	(5.2)	—	破片	—	白色 中や粗	細縁ロクロ成型、継縫、片口2孔 底地・黒墨、1500年位～1610年代初期
22	P-3 鐵土	陶器 碗	—	—	(5.9)	—	破片	—	白色 空模	細縁ロクロ成型、継縫、内面保付着、 打羽根模用・次回に透窓 底地、17世紀前半～暮末
23	P-3 鐵土	土漆器 皿 カワラケ	(9.5)	(6.6)	2.2	—	1/4	棕色 良好	白粉・角窓	ロクロ成型、鉄部未切削、内面保付着、 打羽根模用・次回に透窓 底地、17世紀前半～暮末
24	P-10 鐵土	陶器 碗	—	4.4	(3.5)	—	1/2以下	—	白灰色 空模	ロクロ成型、真石墨、高台無地 底地・黒墨、1600年代～1650年代
25	P-13 鐵土	石製品 鏡	具 13.5	幅 (3.7)	最大厚 1.2	重 74.16	1/2以下	石材 粗粒粉石	—	鐵石に転用している可能性有り
26	P-20 鐵土	黑漆器 鏡	(13.0)	—	(3.1)	—	破片	灰色 良好	白灰色 空模	ロクロ成型、外縁・内面ハジタル模
27	P-29 鐵土	陶器 盆 柳筋模	—	—	(2.3)	—	破片	—	白灰色 空模	ロクロ成型、糸条、内面小柱、見込み丸文、口縁部凹窓、 内面花文、底墨・直縁縫に角縫 模、1620年代～1650年代
28	P-35 鐵土	漆器 皿	(13.8)	9.2	3.5	—	1/2以下	—	白灰色 空模	ロクロ成型、糸条、内面小柱、見込み丸文、口縁部凹窓、 内面花文、底墨・直縁縫に角縫 模、1620年代～1650年代
29	P-50 鐵土	漆器 具 深底盤	—	(10.2)	(1.8)	—	破片	—	白灰色 空模	ロクロ成型、漆器、見込み丸文、内面漆文、 底墨、1600年代～1780年代
30	P-55 鐵土	漆器 具 深底盤	(13.8)	7.3	3.8	—	1/2以下	—	白色 空模	ロクロ成型、豪華、内面漆文、 底墨、1600年代～1780年代
31	P-56 鐵土	黑漆器 皿	(24.0)	—	(7.7)	—	破片	灰色 良好	白灰色 空模	ロクロ成型、自然船仕着
32	P-85 鐵土	陶器 碗	(12.0)	4.9	7.7	—	1/2以上	—	白灰色 空模	細縁ロクロ成型、縦縫、縦目1本単位 底地・黒墨、1500年位～1610年代初期
33	P-85 鐵土	陶器 器	—	—	(6.9)	—	破片	—	白灰色 空模	細縁ロクロ成型、縦縫、縦目1本単位 底地・黒墨、1500年位～1610年代初期

第16表 遺物観察表(2)

()は推定値、(○)は既知値

番号	出土遺物 層位	種類 形態	法量 (cm・g)			残存	色調 構成	胎土 (胎土色/有物)	特徴 調整 大様 領地 等	
			口径	底径	高さ					
34	P-03 覆土	上部陶土器 輪 帽子型 カワリケ	(8.2)	(5.6)	1.0	—	1/4	に赤い青褐色 良好	陶色 黒母	ロクロ成型、底部赤切削 在施。16世紀後半。
35	P-04 覆土	陶器 瓶	(12.0)	5.8	4.7	—	3/4	青白色 中や不良	小標 砂粒 石英 磷酸鉄片岩	ロクロ成型、底部赤切削(右)、裏面刷毛付
36	P-133 覆土	上部陶土器 瓶 カワリケ	12.0	7.3	2.8	—	ほぼ完形	青白 色白地 良好 石英 黒母 黑母	ロクロ成型、外表面下部手彫り(左)、底部赤切削(左) 在施。15世紀後半～16世紀前半。	
37	P-191 覆土	陶器 小型容器瓶	5.8	5.4	6.0	7.6	4/5	灰色 良好	白色 黑色地	ロクロ成型、外表面下端ケズリ(右)、底部赤切削(右)
38	P-192 覆土	木村 瓶	(30.0)	10.0	8.0	—	—	—	—	—
39	P-193 覆土	木村 瓶	(28.7)	10.3	9.2	—	—	—	—	—
40	1-2 覆土	青磁 動物埴板	(25.0)	25.5	1.2	—	—	—	—	打穴△×開
41	1-2 被土	木村 瓶	(49.0)	3.5	—	—	—	—	—	肩部を埋める器の底巻として使用された竹筒
42	W-1 覆土	陶器 罐	36.2	16	15	—	1/2以上	— 良好	赤褐色 堅膜	細縁ロクロ成型、無釉焼成、縁目13本半位 置。18世紀前半
43	W-1 覆土	上部陶土器 瓶 カワリケ	(4.5)	—	(4.0)	(6.2)	破片	青色 良好	砂粒 石英	板状火候形、外表面ナメラ、内面火候、内面一部布目焼 在施。17世紀後半～18世紀前半。
44	W-1 覆土	上部陶土器 瓶 カワリケ	(9.7)	5.2	3.1	—	1/3	に赤い青褐色 中や不良	赤褐色 地 石英 黒母	ロクロ成型、底部赤切削(左)、内面火候、打眼網用 孔。
45	W-2 2層	陶器 瓶 天日干し瓶	(10.4)	—	(5.3)	—	破片	— 良好	灰褐色 堅膜	ロクロ成型、薄壁、高台無軸 施ナメラ、美濃。16世紀後半～17世紀前半
46	W-3 覆土	陶器 瓶 カワリケ	—	4.1	(3.6)	—	1/2以上	— 良好	灰白色 堅膜	ロクロ成型、足込込みノ目顔ハガ、茶付、植物火 照焼。18世紀後半
47	W-3 覆土	陶器 瓶 小口	7.0	2.4	3.8	—	完形	— 良好	白褐色 黒膜	ロクロ成型、透明白、高台無軸 施ナメラ、美濃。16世紀後半～18世紀前半。
48	W-4 覆土	陶器 瓶 丸底瓶	(18.0)	(9.5)	3.8	—	1/2以下	— 良好	灰白色 中や粗	ロクロ成型、透明白、高台無軸 施ナメラ、美濃。16世紀後半～1650年代
49	W-4 覆土	瓦 瓦片瓦	15.0	—	P051 10.4	—	501.77	灰褐色 良好	堅膜	墨脱し成型、二巴左番・珠文帶 [16]
50	W-5 覆土	漆器 瓶	—	—	(5.8)	—	1/2	赤色	—	推定元美濃
51	W-5 覆土	石器品 瓦片瓦 地磚	高 32.5	幅 34.6	長 42,500.00	—	2/3	粘土石 粘土石安山岩	—	下面削り工工痕。礫石に転用している可能性有り
52	W-6 覆土	陶器 瓶	—	6.5	(5.7)	6.8	1/2以下	— 良好	灰褐色 堅膜	ロクロ成型、薄壁(右)、外表面鉛、内面火候、器底脱脂取除 施ナメラ、美濃。18世紀
53	W-10 上層	陶器 瓶 カワリケ	(11.2)	4.3	5.3	—	1/2以上	— 良好	白褐色 堅膜	ロクロ成型、足込込みノ目顔ハガ、生地剥げ。茶付、丸火、 足込み火照焼。18世紀後半
54	W-10 上層	陶器 瓶 云龍 瓦片瓦	(11.2)	(6.0)	6.1	—	1/2以下	— 良好	白色 堅膜	ロクロ成型、茶付、白褐色、内面火照焼あり 美濃。1780年代～1830年代
55	W-10 上層	陶器 瓶 段差	(12.0)	(7.0)	3.7	—	1/2以下	— 良好	白色 堅膜	ロクロ成型、口履部外表面無鉛、茶付、花卉火 照焼。18世紀～19世紀前半
56	W-10 下層	陶器 瓶 小口平底	8.8	3.4	5.6	—	1/2以上	— 良好	白褐色 黒膜	ロクロ成型、透明白、高台無軸。鉛脱脂取除火 照焼。1780年代～1830年代
57	W-10 上層	内瓦片 瓶	(29.0)	—	(5.0)	—	破片	外表面青褐色 内面に赤い青褐色	白色 黑母石 地 白褐色 黑母石	墨脱し成型カバノ口型、外表面火候。底部丸底・墨脱り・縁目 地脱脂は地面の不均一・側面から回化
58	W-10 上層	上部陶土器 瓶 カワリケ	(5.0)	—	(3.4)	—	破片	青褐色 良好	黑母	ロクロ成型 瓦片。18世紀後葉～19世紀
59	W-10 上層	上部陶土器 瓶 2年	(12.0)	丁番径 (12.0)	厚 1.3	乳径 2.0	破片	下部青褐色 下部に青褐色 良好	砂粒 黑母石 地 白褐色 中や粗	上部質。2丸存在。上面神注口・邊縁印ケズリ、側面ナメ ラ
60	W-10 上層	金銀製品 管 銀質	(4.0)	(1.1)	—	小寸通 0.8	大銀頭 互組	—	—	羅宝管。銀製 18世紀
61	W-10 上層	木村 瓶	(35.5)	7.3	2.1	—	—	—	—	打穴△×開
62	W-10 上層	木村 瓶	(39.4)	9.2	1.8	—	—	—	—	打穴△×開
63	W-11 8層	陶器 片	—	6.6	(2.1)	—	破片	— 良好	白褐色 中や粗	ロクロ成型、内面鉛。高台無軸。茶付着 施ナメラ、美濃。18世紀
64	W-11 瓶口	陶器 瓶	—	(9.0)	(4.1)	—	破片	— 良好	白褐色 中や粗	ロクロ成型、内面鉛。高台無軸。白褐色茶付着 施ナメラ、美濃。18世紀
65	W-11 G30	想石	長 60.8	幅 40.6	厚 27.6	—	—	—	—	削磨。石間に墨着「八月 頃 / 六人道」
66	W-11 G30	想石	長 57.1	幅 40.6	厚 32.8	—	—	—	—	削磨。小口に墨着「十一人G」

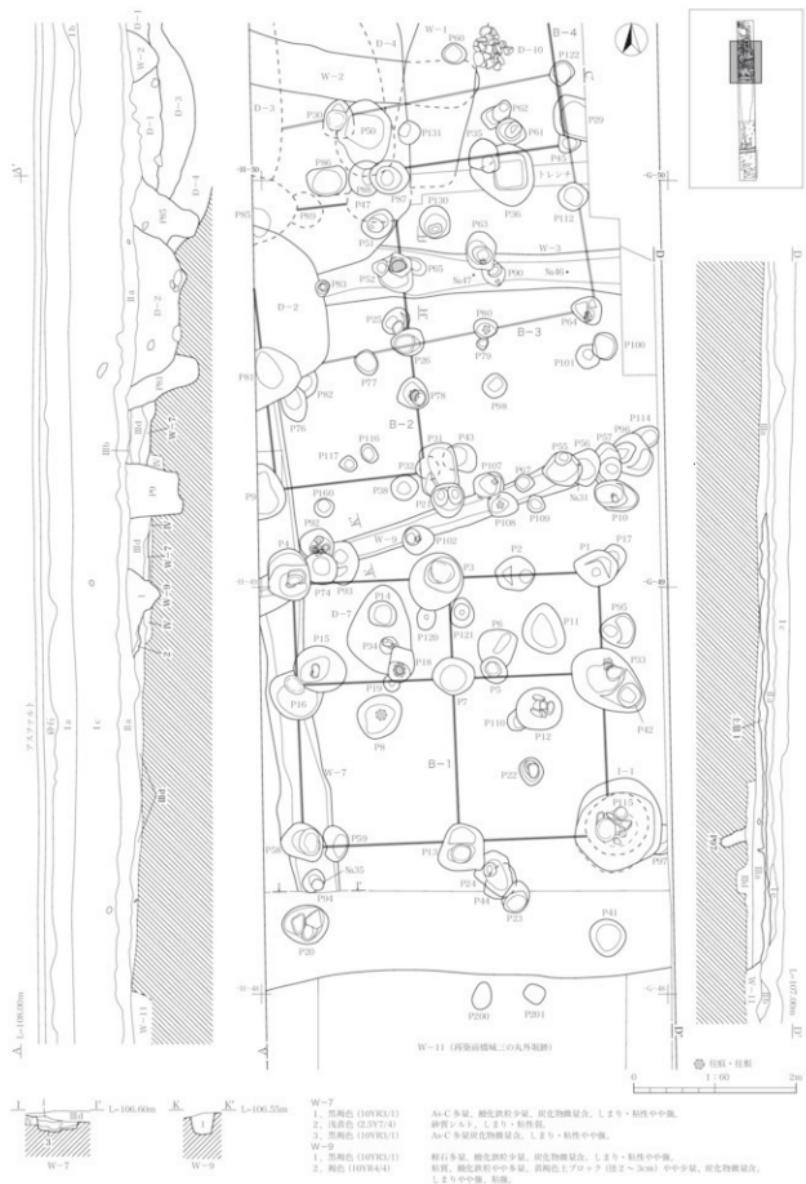
第17表 遺物觀察表(3)

()は推定値、()は現存値

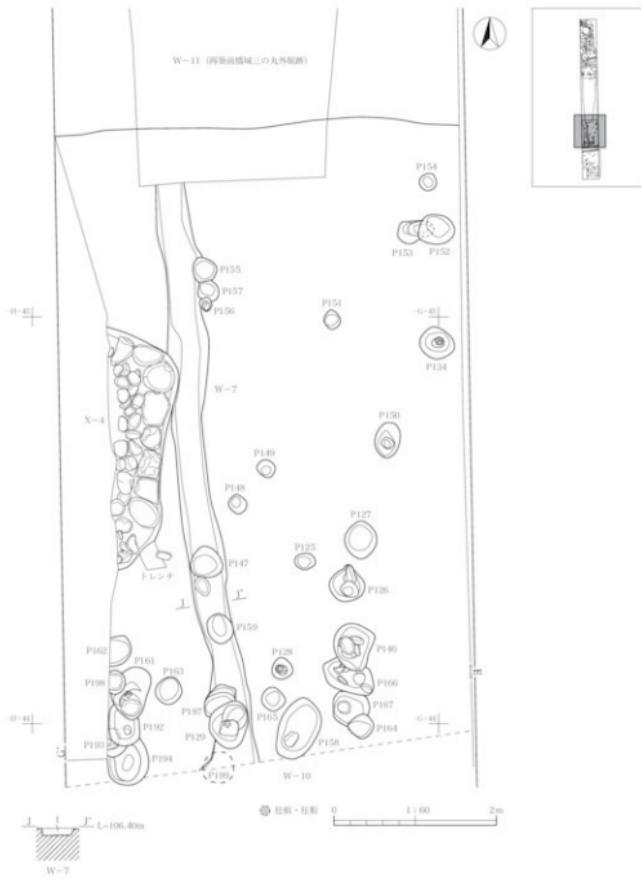
番号	出土遺物 部位	種類 用法	法量 (cm・g)			残存	色調 模様	鉄土 (鉄土色/含物)	特徴 調整 天端 磨滅 等	
			口径	直径	高さ					
67	W-11 G付	石斧	長49.1	幅46.6	厚24.0	—	—	—	素面。挫丸に葉唐「△」	
68	W-11 G付	石斧	長52.1	幅43.5	厚17.9	—	—	—	素面。取り口のU字形槽。挫丸に葉唐「△」	
69	W-11 G付	石斧	長56.4	幅39.7	厚22.4	—	—	—	素面。小口U字形槽。挫丸に葉唐「△」	
70	W-11 G付	石斧	長58.0	幅57.2	厚29.5	—	—	—	素面。挫丸に葉唐「△」	
71	W-11 G付	石斧	長44.4	幅46.8	厚22.1	—	—	—	素面。挫丸に葉唐「△」	
72	W-11 G付	石斧	長41.6	幅45.3	厚24.5	—	—	—	素面。挫丸に葉唐「△」	
73	W-11 G付	製木	幅303.2	幅22.4	厚23.6	—	—	—	材質松。下面手斧による加工	
74	X-1 裏土	瓦 削瓦	長(3.5)	幅(9.7)	厚(1.9)	重 利平底 破片	灰色 良好	型顎	板作り。塑型て。押し成形。透空文	
75	X-2 裏土	瓦 削瓦	(8.60)	幅(11.7)	厚(1.8)	重 利平底 破片	灰色 良好	型顎	板作り。塑型て。押し成形。透空文	
76	X-3 裏土	利唐器 耳	—	7.1	(0.9)	—	褐色 良好	白色系 黑色系	ロクヨ成形。底部未切削(左)	
77	G-49 ブリッヂ 頭部	縦面 頭 丸頭	(D.0.2)	4.5	6.7	—	1/2 良好	白色 型顎	ロクヨ成形。象目。方彌摩竹背文。透空文。1600年代～1720年代	
78	G-49 ブリッヂ 頭部	縦面 頭 丸頭	(D.0.8)	(4.4)	5.6	—	1/2以下 良好	白色 型顎	ロクヨ成形。象目。街角透空文。底裏鋸刃 彫刻。1600年代～1780年代	
79	G-50 ブリッヂ 頭部	縦面 頭 手抜孔	(D.0.9)	3.7	5.0	—	1/2以下 良好	白色 型顎	ロクヨ成形。象目。花透空文。見込み丸文 透空。1600年代～1860年代	
80	G-50 ブリッヂ 頭部	縦面 頭 頭部 頭部丸頭	—	4.1	(3.3)	—	1/2以下 良好	白色 型顎	ロクヨ成形。透空。象目透空文。底裏手抜き五瓣花文。 透空。1700年代～1730年代	
81	G-49 ブリッヂ 頭部上面	縦面 頭	(D.0.8)	11.0	3.9	—	1/2以上 良好	灰白色 型顎	ロクヨ成形。象目。内面透空文。外側透空文。頭裏頭字彙 彫刻。1750年代～1810年代	
82	G-50 ブリッヂ 頭部	縦面 頭 透物蓋	—	—	(1.8)	—	破片 良好	灰色 頭部	ロクヨ成形。外前頭部透空。植物文 透空。1650年代～1660年代	
83	G-50 ブリッヂ 頭部上面 頭部丸頭	陶面 頭 頭部	11.7	5.6	8.0	—	1/2以上 良好	灰色 中中粗	ロクヨ成形。頭部「う」の字彫刻。西面無彫 彫刻。1660年代～1750年代	
84	G-50 ブリッヂ 頭部	陶面 頭 頭部	(D.0.8)	4.8	7.0	—	1/2以上 良好	灰色 中中粗	ロクヨ成形。頭部「う」の字彫刻。西面無彫 彫刻。1660年代～1750年代	
85	G-50 ブリッヂ 頭部	西面 頭 頭部	13.6	6.2	3.5	—	1/2以上 良好	灰白色 中中粗	ロクヨ成形。頭部。網目彫刻。西面無彫。見込み丸印3, 内側透空文。透空。1670年代～1740年代	
86	G-51 ブリッヂ 頭部	陶面 頭 頭部頭部	(D.0.4)	5.4	7.0	—	1/2以下 良好	白色 頭部	ロクヨ成形。透明彫。西面無彫。鉄筋。山本文 透空。1670年代～1740年代	
87	G-49 ブリッヂ 頭部	内耳上唇 内耳頭	—	—	(10.1)	(2.6)	破片	外側黒褐色 内面に二つ褐色 良好	白色系 赤褐色 雲母	ロクヨ成形。ロクヨ成形。外側透空 透空。15世紀末～16世紀前半
88	G-50 ブリッヂ 頭部	内耳上唇 大鉢	(28.6)	—	(5.2)	—	破片	に赤褐色 中中粗好	白色系 赤褐色 雲母	ロクヨ成形。頭部。網目彫刻。外側ケヤキナガ 透空。中性
89	G-50 ブリッヂ 頭部	赤地土唇 大鉢	—	(29.0)	(8.9)	(35.4)	破片	内面に赤褐色 内面透空彫	赤褐色 白系 雲母	赤褐色 透空。網目彫刻。ロクヨ成形。足現存。外側摩滅 透空。15世紀末～16世紀前半
90	G-51 ブリッヂ 頭部	土唇貫土唇 五鉢	(4.5)	—	(4.6)	—	破片	外側透空 内面に二つ褐色 良好	赤褐色 雲母	ロクヨ成形。切り欠き1ヶ所現存 (左)
91	G-51 ブリッヂ 頭部	土唇貫土唇 頭 カワラケ	(9.3)	5.5	2.1	—	1/3 良好	陶粒 雲母 頭部	ロクヨ成形。底面透空 透空。17世紀前半～幕末	
92	G-49 ブリッヂ 頭部	土唇貫 頭 カワラケ	—	6.1	(0.9)	—	破片 良好	に赤褐色 中中粗好	赤褐色 雲母 頭部	ロクヨ成形。底面未切削(右)。底面透空(右穴)。打開頭軸用 透空。透空。
93	G-49 ブリッヂ 頭部	利唐器 耳	—	6.1	(2.6)	—	破片	内面透空 外側に二つ褐色 中中粗好	陶粒 頭部 雲母	内面透空 外側に二つ褐色 中中粗好
94	G-49 ブリッヂ 頭部	利唐器 頭	(23.8)	—	(11.0)	(27.2)	破片	内面に二つ褐色 内面透空彫 中中粗好	陶粒 頭部 雲母	ロクヨ成形。触化焼成
95	G-49 ブリッヂ 頭部	土唇器 頭	(19.2)	—	(9.1)	(20.9)	破片	外側透空 内面に二つ褐色 良好	陶粒 頭部 雲母	内面透空オカナゲ。底面外側ヘラケギリ。 内面透空ハメ・底面ナガ
96	G-49 ブリッヂ 頭部	瓦 瓦	長(1.6)	幅(14.6)	厚(1.7)	重 330.43	破片	凸面陶瓦色 内面に二つ褐色 中中粗好	陶粒 白色 雲母 チャート	板上研磨つけ作り。凸面ナガ。凹面ナガ。凹面布目窓
97	G-51 ブリッヂ 頭部上面	瓦質 瓦	—	—	—	—	—	—	頭部	
98	表土 知母根	瓦質 瓦	—	—	—	—	—	—	頭部	



第6図 調査区北部分割図

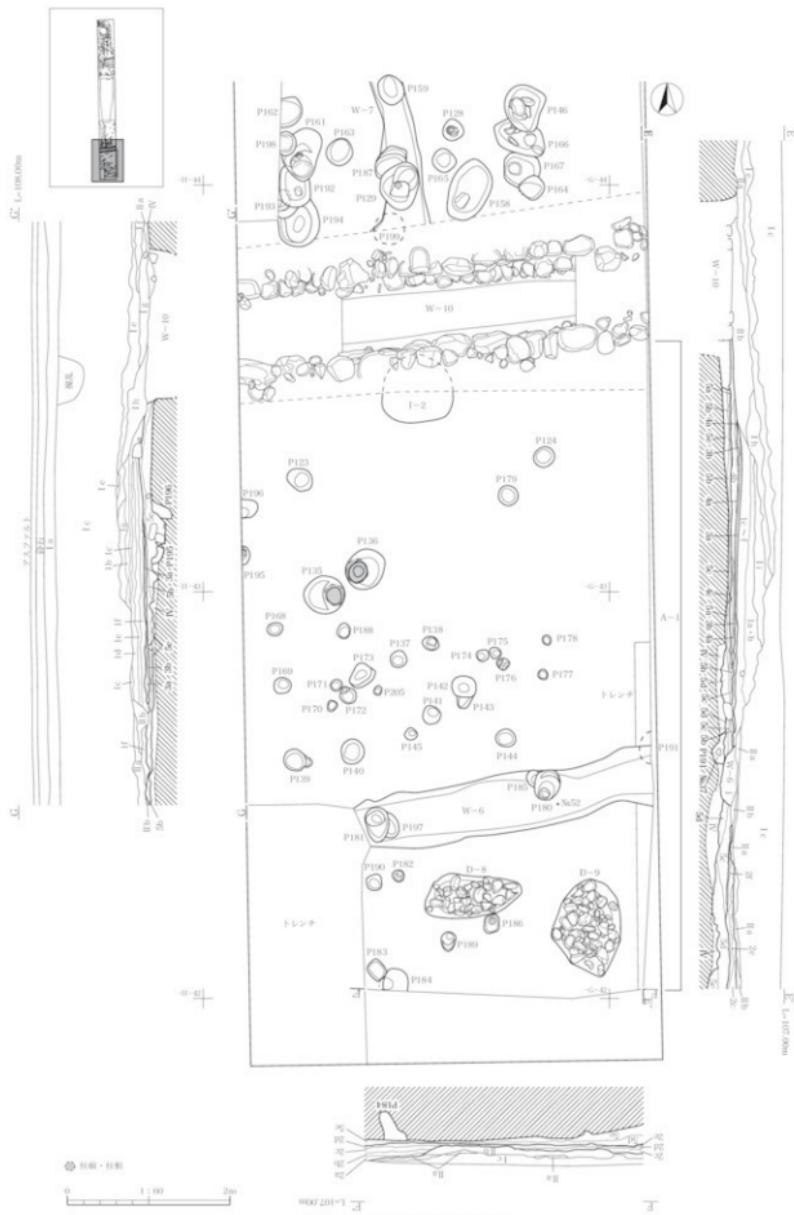


第7図 調査区北部部分剖面図

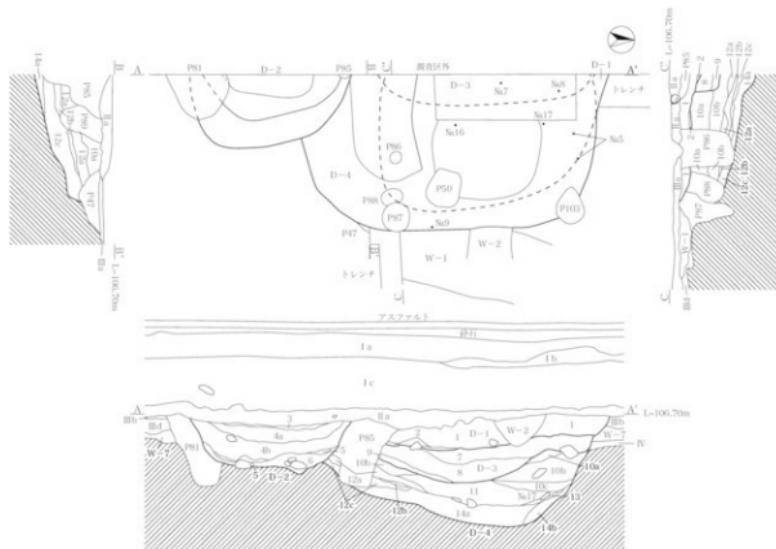
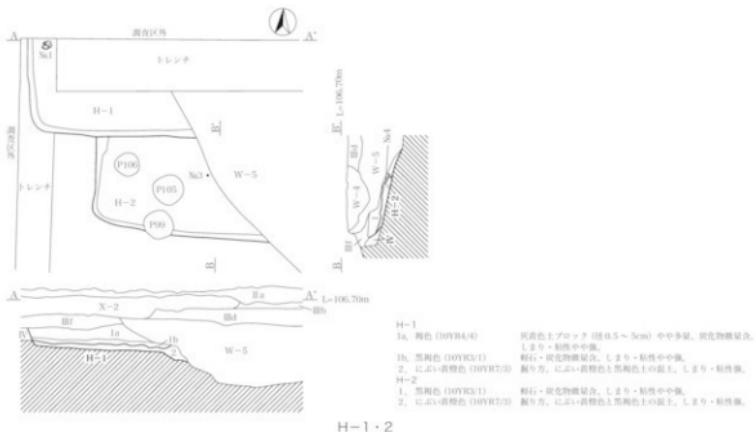


- A-1**
- 1a. 黒褐色 (HOYR5/1) 砂質シルト, 砂質多孔岩, しまりや中強, 強性や中強.
 - 1b. 黑褐色 (HOYR5/1) 砂質シルト, 砂質多孔岩, しまりや中強, 強性や中強.
 - 1c. 黑褐色 (HOYR5/2) 硬化, 砂質多孔岩, しまりや中強, 強性や中強.
 - 1d. 黑褐色 (HOYR5/2) 砂質多孔岩合, しまり強, 強性や中強.
 - 1e. 黑褐色 (HOYR5/2) 破状に砂質多孔, 相手少混合, しまりや中強, 強性弱.
 - 1f. 黑褐色 (HOYR5/2) 破状に砂質多孔, 相手少混合, しまりや中強, 強性弱.
 - 2a. 黑褐色 (HOYR4/1) 小砂質多孔合, しまり・強性弱.
 - 2b. 黑褐色 (HOYR4/4) 小砂質多孔合, しまり・強性弱.
 - 2c. 黑褐色 (HOYR4/1) 相手少混合, しまり・強性弱.
 - 2d. 黑褐色 (HOYR4/1) 破質シルト, 固化土少量, 小砂質多孔合, しまりや中強, 強性強.
 - 2e. 黑褐色 (2.5VRG/3) 破質シルト, 固化土少量, 小砂質多孔合, しまりや中強, 強性強.
 - 3a. 黑褐色 (7.5VRG/2) 破化土, 砂質多孔, 黑褐色土粒, 硬化物微量混合, しまり非常に強, 強性弱.
 - 3b. 一二三・黑褐色 (HOYR3/4) 破化土, 破化, 砂質多孔合, しまり非常に強, 強性弱.
 - 4a. 黑褐色 (HOYR4/1) 破化土, 破化, 砂質多孔合, しまり強, 強性弱.
 - 4b. 一二三・黑褐色 (HOYR4/2) 破化土, 破化多量混合, しまり強, 強性弱.
 - 4c. 黑褐色 (HOYR4/1) 破化土, 破化多量混合, しまり強, 強性弱.
 - 5a. 一二三・黑褐色 (HOYR3/2) 破化, 破化多量混合, しまり・強性や中強.
 - 5b. 黑褐色 (HOYR4/2) 破砂質多孔合, しまり・強性や中強.
 - 5c. 黑褐色 (HOYR4/2) 破砂質多孔合, しまり・強性や中強.
 - 5d. 黑褐色 (HOYR5/2) 破質シルト, 破砂質多孔合, しまりや中強, 強性弱.
 - 5e. 黑褐色 (N4) 破質シルト, 破砂質多孔合, しまりや中強, 強性や中強.

第8図 調査区南部分潮圖1

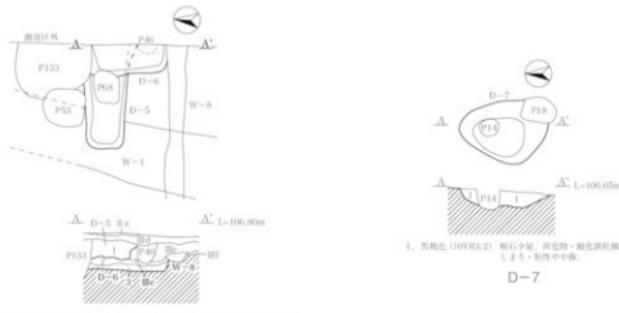


第9図 調査区南部分割図



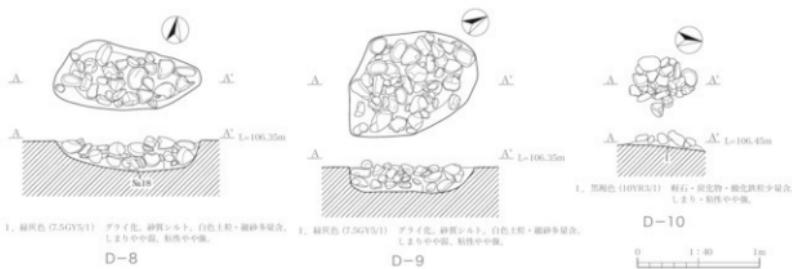
D-1～4

第10図 H-1・2号住跡、D-1～4号土坑



D-5 · 6

D-6

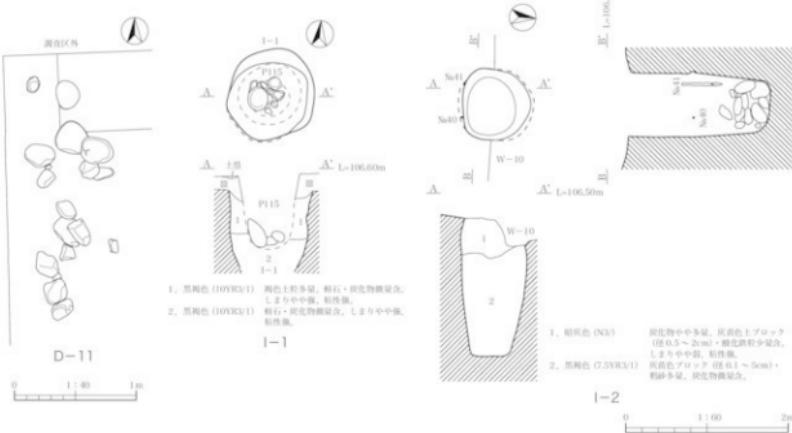


D-5 · 6

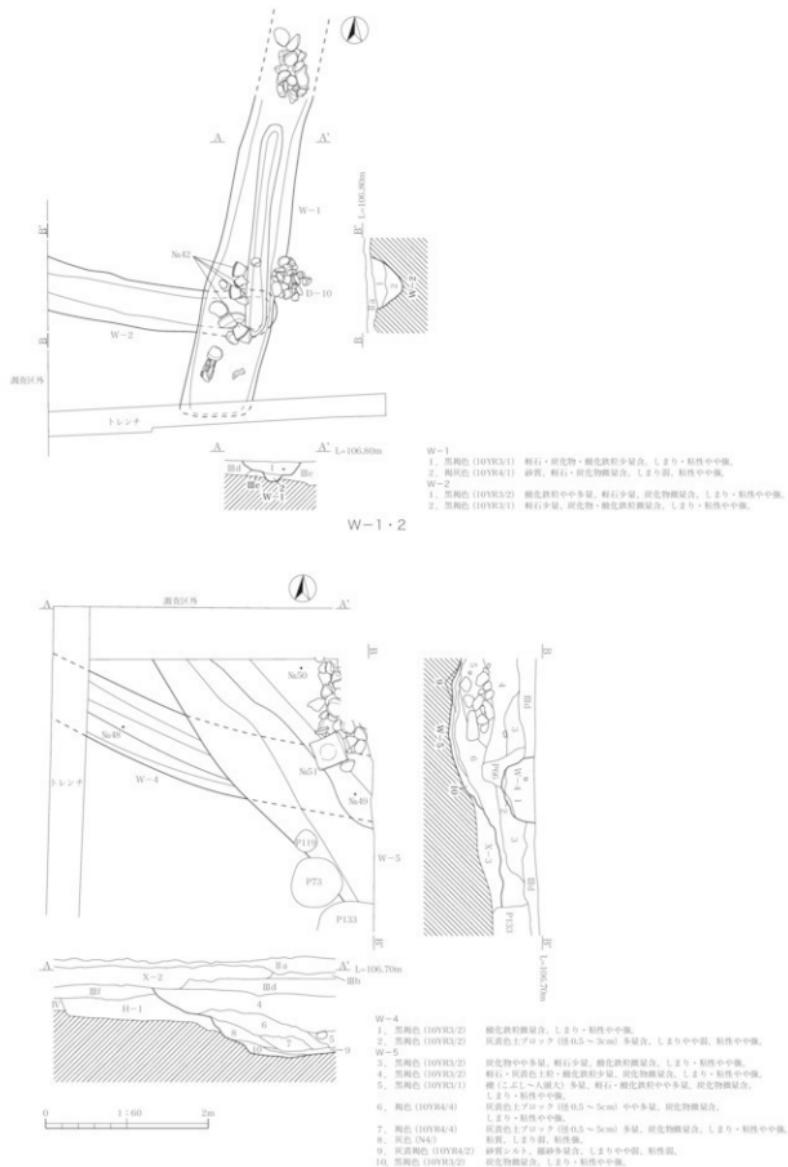
D-8

D-9

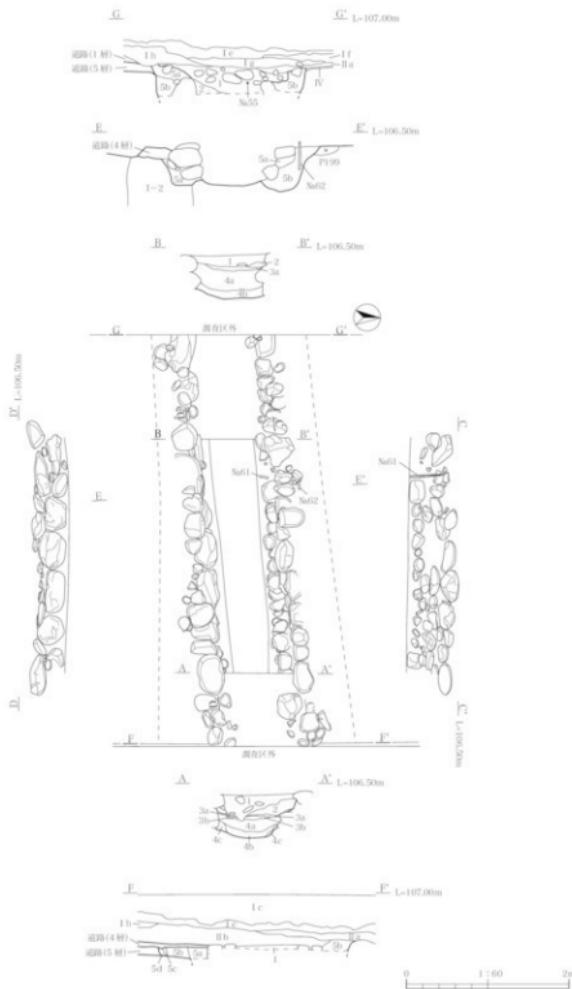
D-10



第11図 D-5 ~ 11号土坑、I-1・2号井戸跡



第12図 W-1 · 2 · 4 · 5号講跡

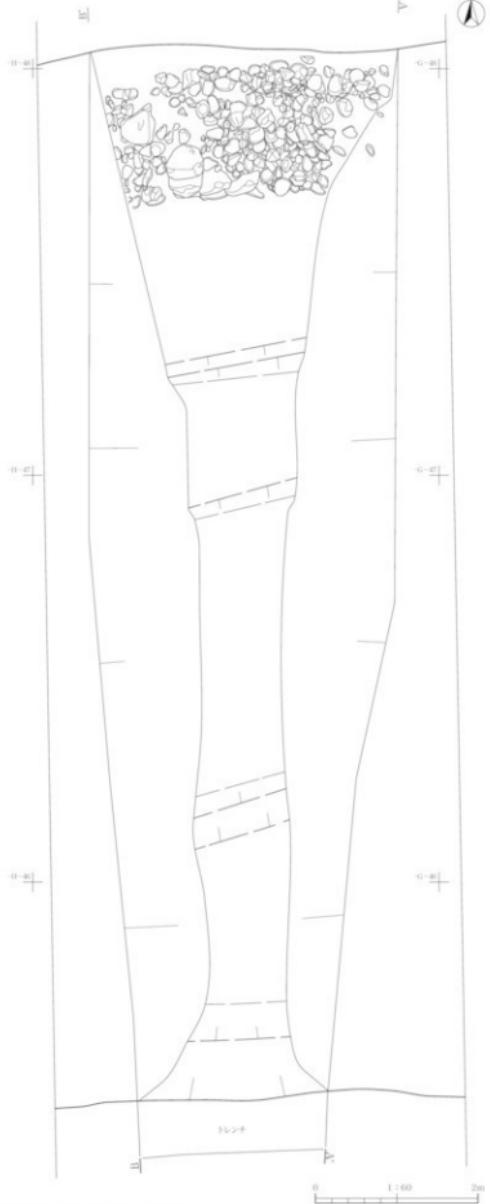
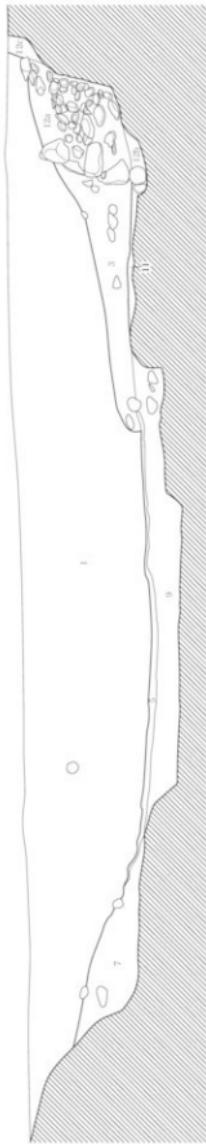


1. 黄褐色 (10YR4/1)
2. 黄褐色 (10YR2/1)
3a. 灰褐色 (2.5YR6/3)
3b. 黄褐色 (10YR5/2)
4a. 黄褐色 (10YR4/1)
4b. 黄褐色 (10YR4/1)
4c. 黄褐色 (10YR2/1)
5a. 黄褐色 (10YR4/2)
5b. 姑黄色 (N3)
5c. 灰褐色 (10YR4/4)
5d. 黄褐色 (10YR4/2)
- 特征: 带「（）」のものは多く含む。
層厚・地質・岩相を示す。上から順に、層厚、地質や岩相。
砂質シルト、しまり層、粘性や中強。
砂質シルト、細砂多量含、しまり層、粘性や中強。
粘性、細砂微少含、しまり層、粘性や中強。
細砂、中強含、しまり層、粘性や中強。
振り方、所測記号ブロック (付1～3cm)・屢々多量含、第6の層測縮化。しまり層、粘性強。
振り方、灰褐色上ブロック (付1～3cm)・少量含、しまり層、粘性強。
振り方、細化、細砂多量含、しまり層、粘性や中強。
振り方、細砂多量含、しまり、粘性や中強。

第13図 W-10号溝跡

L-107.00m

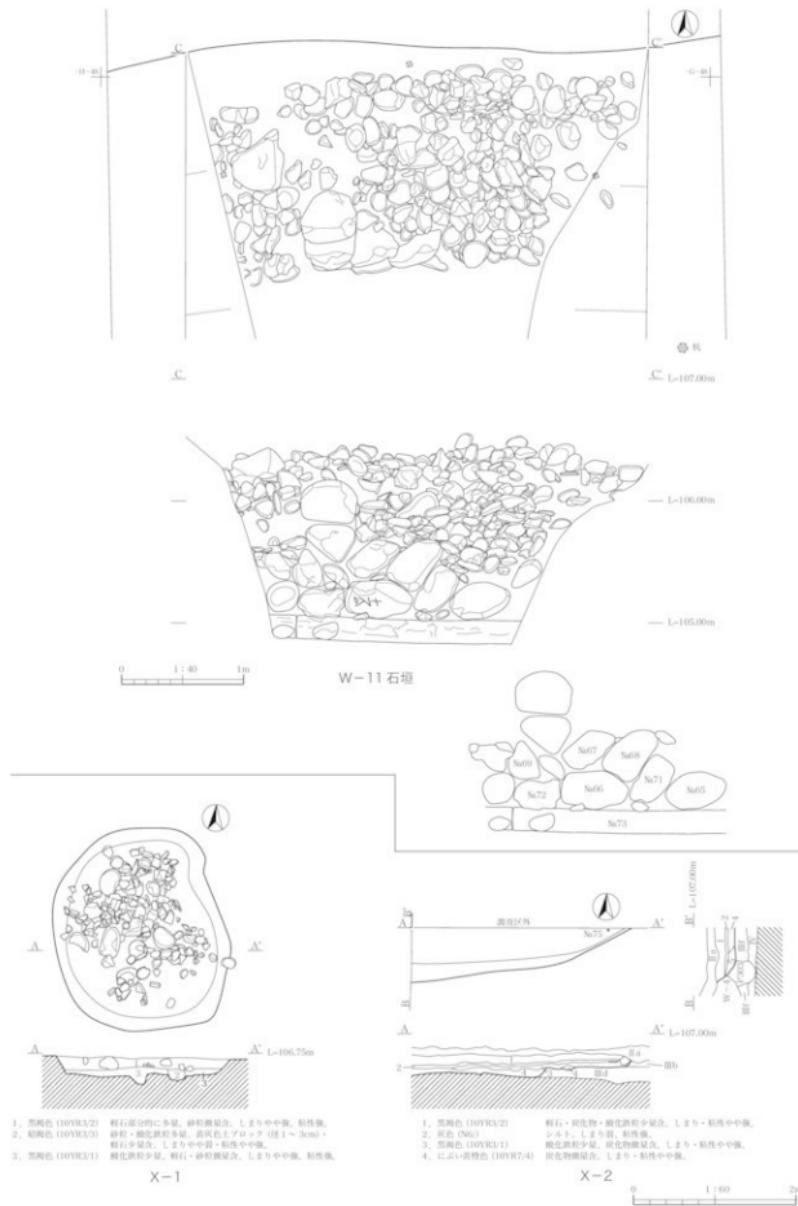
W



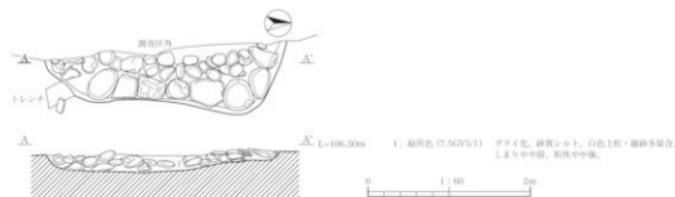
第14図 W-11号廻跡(1)



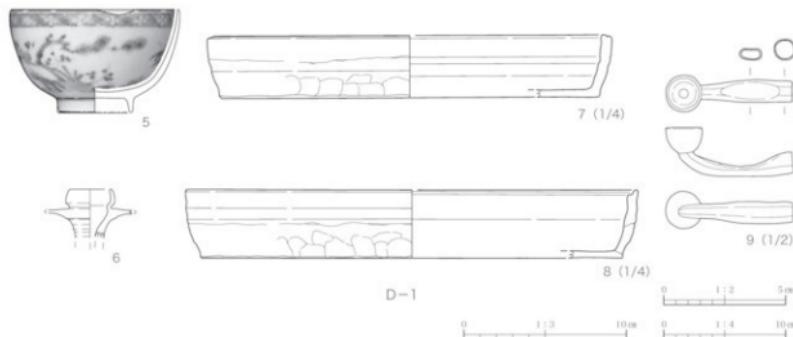
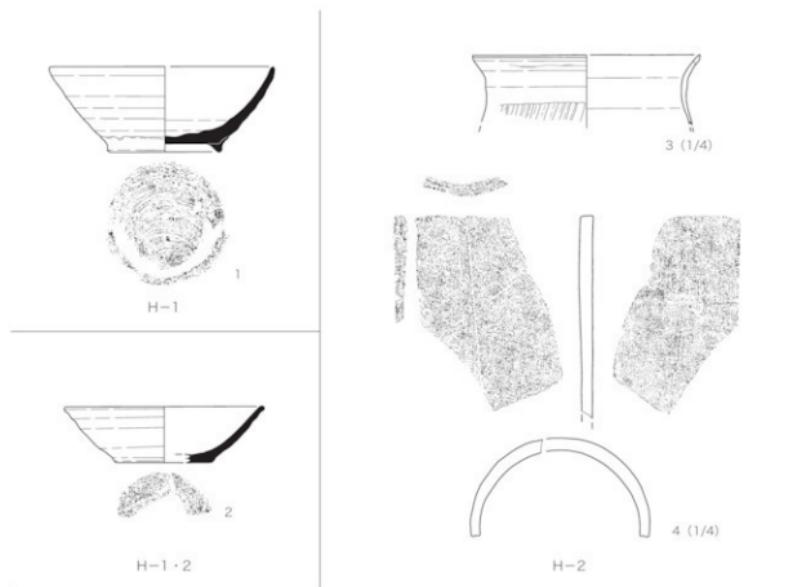
第15図 W-11号堀跡(2)



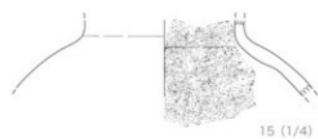
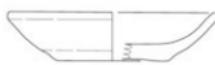
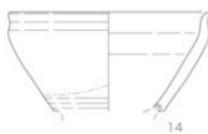
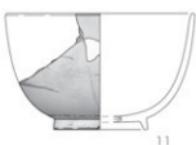
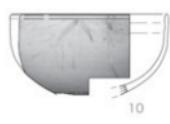
第16図 W-11号掘跡(3)、X-1・2号瓦だまり



第17図 X-4号性格不明遺構



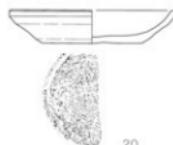
第18図 H-1・2号住居跡、D-1号土坑出土遺物



D-2



D-4

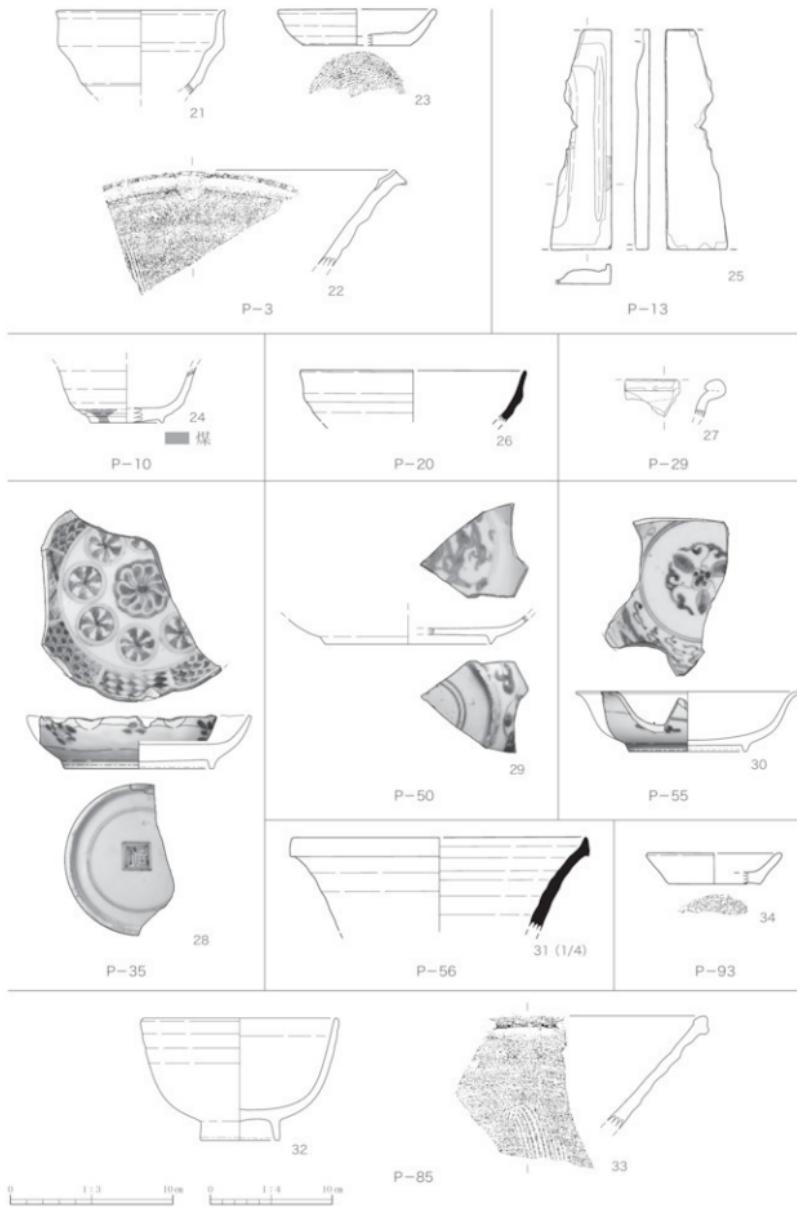


P-2

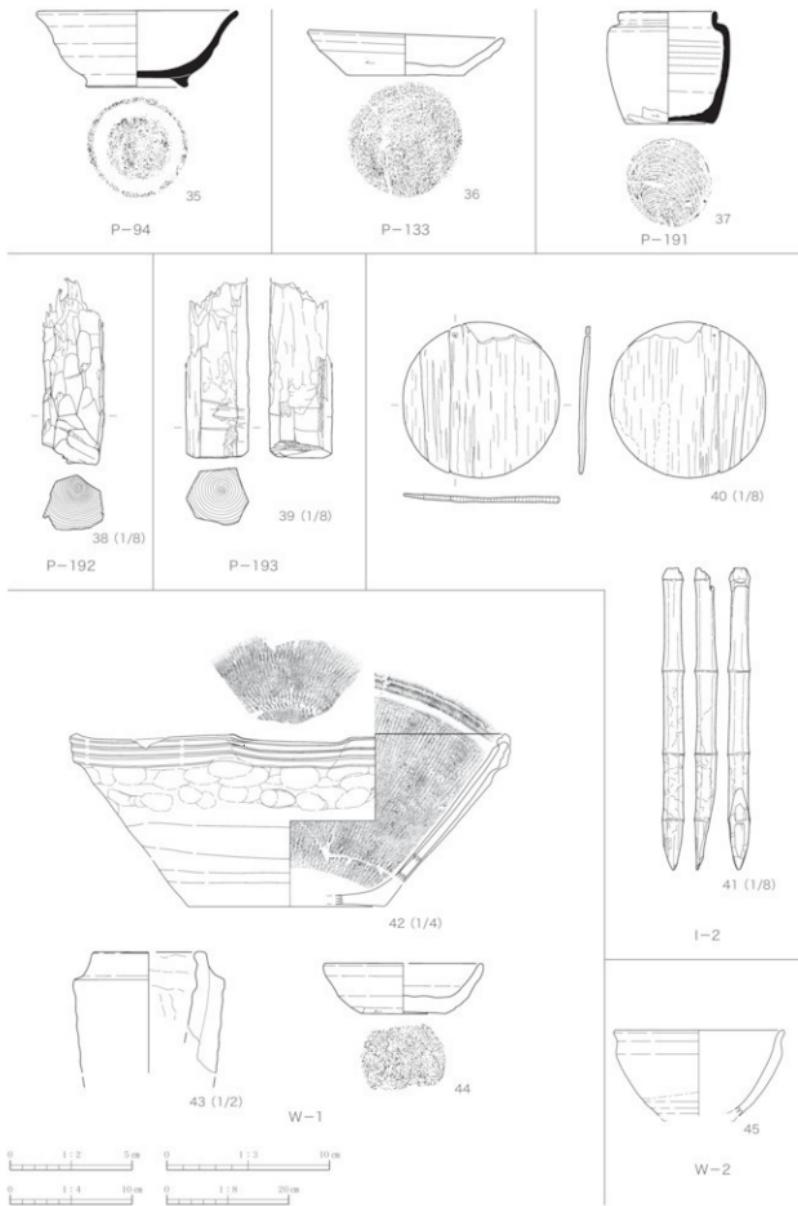
D-8



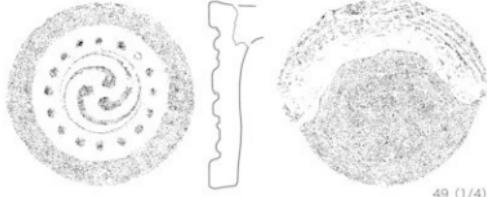
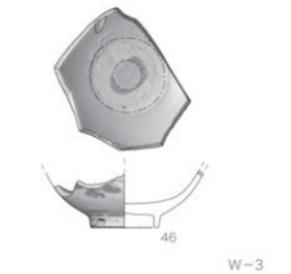
第19図 D-2・4・8号土坑、P-2号ピット出土遺物



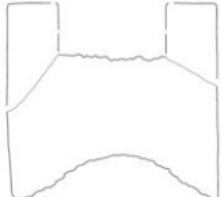
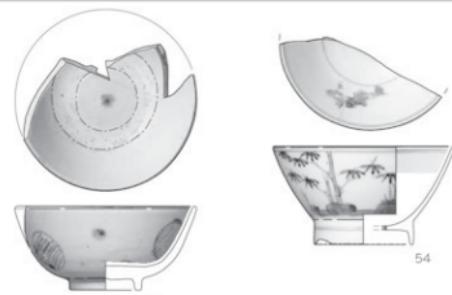
第20図 P-3・10・13・20・29・35・50・55・56・85・93号ピット出土遺物



第21図 P-94・133・191～193号ビット、I-2号井戸跡、W-1・2号講跡出土遺物



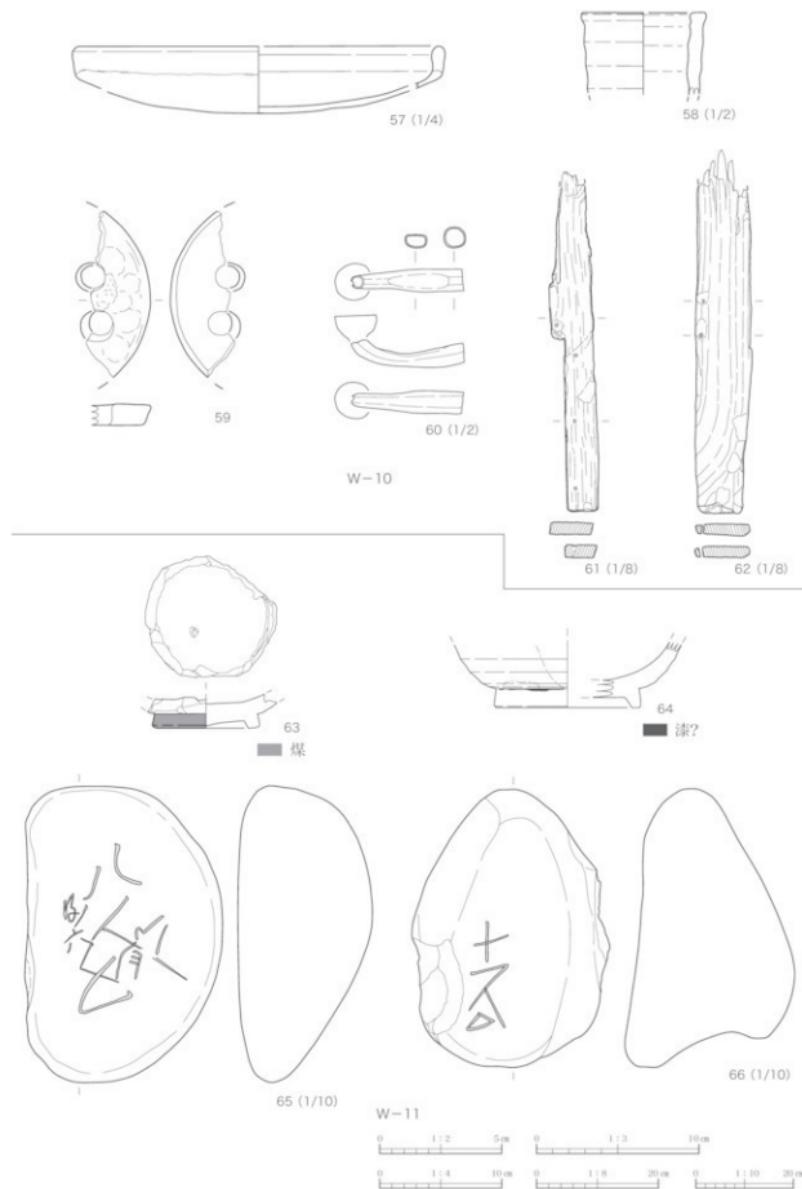
W-4



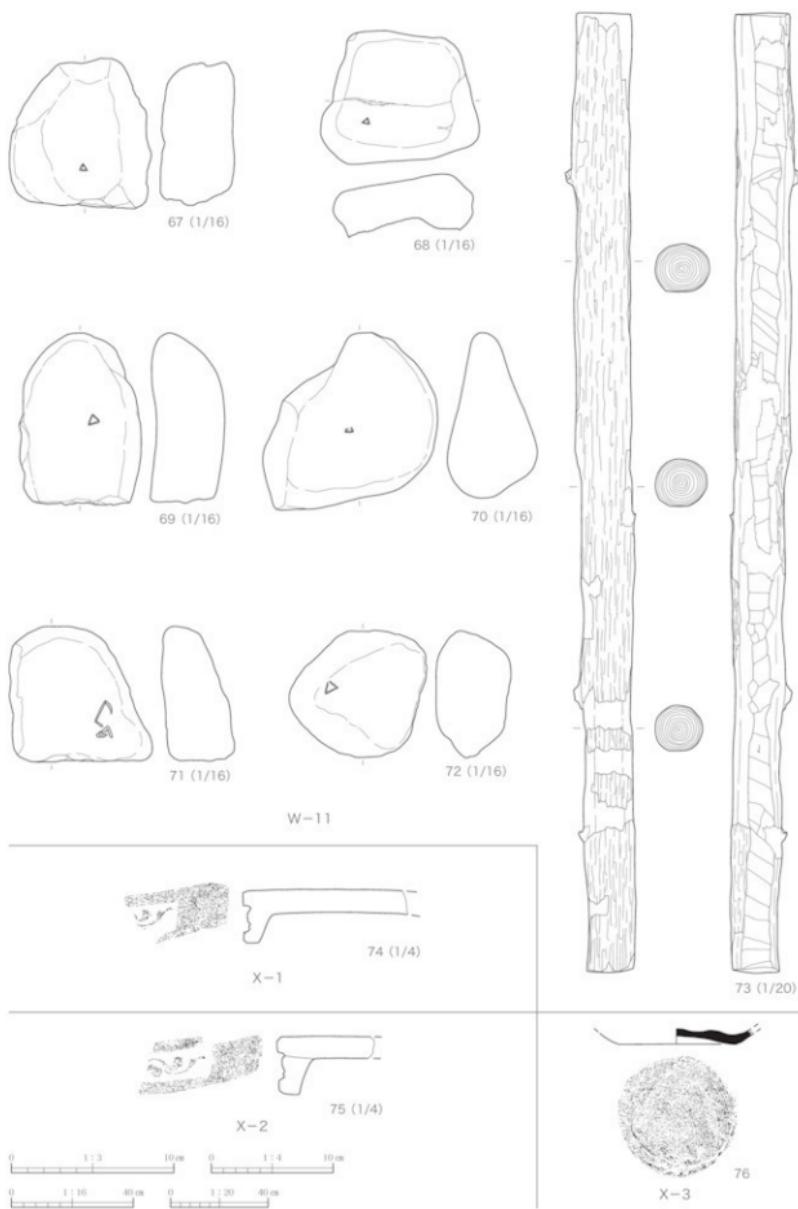
W-10



第22図 W-3～6・10号溝跡出土遺物



第23図 W-10号溝跡、W-11号堀跡出土遺物



第24図 W-11号堀跡、X-1・2号瓦だまり、X-3号性格不明遺構出土遺物



77



78

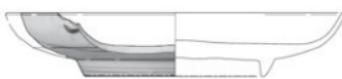


79



青磁

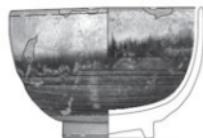
80



81



82



83



84



85



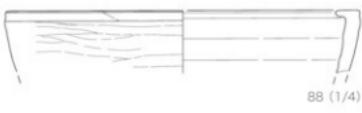
86

A scale bar with markings at 0, 1:3, and 10 cm.

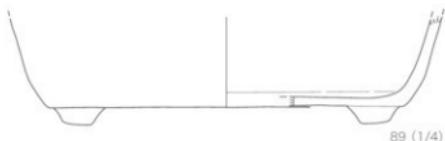
第25図 近世整地層（田層）出土遺物



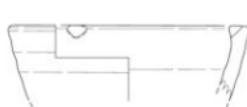
87 (1/4)



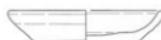
88 (1/4)



89 (1/4)



90



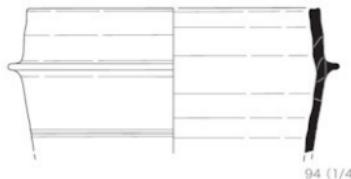
91



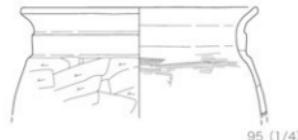
92



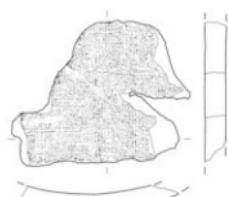
93



94 (1/4)



95 (1/4)



96 (1/4)



97 (1/1)

0 1:1 2cm

0 1:3 10cm

近世整地層（Ⅲ層）

0 1:4 10cm



表土

98 (1/1)

第26図 近世整地層（Ⅲ層）、表土出土遺物

第VI章 地質調査とテフラ検出分析

第1節 はじめに

前橋城（三の丸門東地点）における発掘調査では、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された。そこで、地質調査を行うとともに、テフラ検出分析を実施して、土層や遺構の層位や年代に関する資料の収集を行った。調査分析の対象は、W-11号堀跡セクションA-A'・セクションA-A'南地点、W-7号溝跡の3地点である。

第2節 土層の層序

（1）W-11号堀跡セクションA-A'

セクションA-A'では、最下部に堅くしまった礫混じり砂質堆積物（礫の最大径203mm）が認められる（第27図）。層界は確認できなかったものの、その上位には、下位より上方に角礫が濃集した灰色砂礫層（層厚33cm、礫の最大径241mm）、成層したテフラ層（層厚25cm）、若干色調が暗い灰色泥層（層厚9cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰色泥層（層厚8cm）、礫混じり暗灰色泥層（層厚18cm、礫の最大径71mm）、白色軽石層（層厚11cm、軽石の最大径8mm、礫の最大径2mm）、白色軽石を多く含む灰褐色砂質泥層（層厚10cm、軽石の最大径7mm）が認められる。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の黄灰色粗粒火山灰層（層厚9cm）と、上部の黄灰色細粒軽石層（層厚16cm、軽石の最大径3mm）からなる。

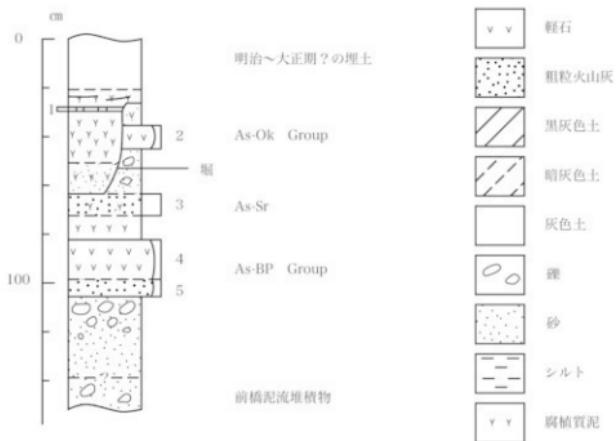
これらの堆積物は、前橋城の堀で切られている。堀は、下位より白色軽石を含む炭化材混じり灰色砂質泥層（層厚13cm、軽石の最大径8mm）、暗灰色泥層（層厚20cm）、白色シルト層（層厚1cm）、かすかに成層した暗灰褐色泥層（層厚9cm）、堀の埋土（層厚90cm以上）が認められる。最上部の堀の埋土については、明治から大正にかけての堆積物の可能性がある。

（2）W-11号堀跡セクションA-A'南地点

セクションA-A'南地点では、セクションA-A'で認められた成層したテフラ層の上位に、下位より灰色泥層（層厚17cm）、白色粗粒火山灰に富み黄色がかった灰色泥層（層厚16cm）、暗灰色泥層（層厚6cm）、上部が波状に変形を受けた白色軽石層（層厚10～16cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径2mm）、黄色がかった灰色シルト層（層厚1cm）、砂を多く含む暗灰褐色泥層（層厚18cm）、暗灰褐色泥層（層厚11cm）、黒褐色泥層（層厚4cm）、白色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径2mm）、白色軽石に富み層理が発達した灰色砂質泥層（層厚10cm以上、軽石の最大径11mm）が認められる（第28図）。

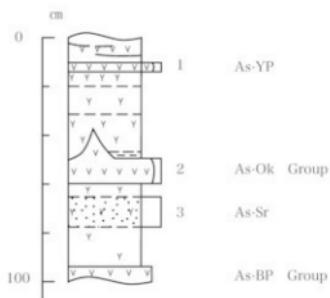
（3）W-7号溝跡

W-7号溝跡の覆土は、下位より灰白色軽石混じり暗灰色土（層厚2cm、軽石の最大径7mm）、粒径がそろった黄白色砂層（層厚3cm）、灰白色軽石を多く含む黒灰色土（層厚8cm、軽石の最大径6mm）、灰色土（層厚6cm）、灰白色軽石混じりで若干色調が暗い灰色土（層厚12cm、軽石の最大径3mm）からなる（第29図）。

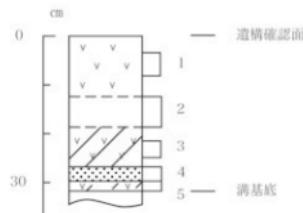


第27図 W-11号堀跡セクションA-A'の土層柱状図

※数字はテフラ分析の試料番号



第28図 W-11号堀跡セクションA-A'南地点の土層柱状図



第29図 W-7号溝跡覆土の土層柱状図

第3節 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

W-7号溝跡の覆土のうち、特徴的なテフラ粒子を含む、あるいは含む可能性が考えられた試料3～5の3点について、含まれるテフラ粒子の特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行った。テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料を8 g 秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第18表に示す。W-7号溝跡の試料3～5には、いずれにもスponジ状によく発泡した灰白色の軽石（最大径2.6mm）や、その細粒物である発泡した灰白色のスponジ状軽石型火山ガラスが含まれている。斑晶鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。これらのうち、試料5には、ほかに、斑晶に角閃石をもつ、細かく発泡した白色のスponジ状軽石型火山ガラスがごくわずかに含まれている。

第18表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
W-7号溝跡	3	*	灰白	2.0	**	pm	灰白
	4	*	灰白	2.3	*	pm	灰白
	5	**	灰白	2.6	**	pm	灰白、白

***: とくに多い、 **: 多い、 *: 中程度、 : 少ない、 最大径の単位は、mm

bw: バブル型、 pm: 軽石型

第4節 考察

テフラ検出分析で認められたテフラ粒子のうち、灰白色の軽石や軽石型ガラスは、色調、発泡様式、重鉱物の組み合わせなどから、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、荒牧1968、新井1979、坂口2010）に由来すると考えられる。

また、斑晶に角閃石をもつ白色の軽石型ガラスについては、その色調、発泡様式、そして角閃石を含むことなどから、古墳時代に榛名火山から噴出したテフラに由来すると考えられる。それらは、5世紀に榛名火山から噴出した榛名有馬テフラ（Hr-AA、町田ほか1984）、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井1979、坂口1986、早田1989、町田・新井1992・2003）、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井1962、坂口1986、早田1989、町田・新井1992・2003）である。また、Hr-FAやHr-FPに関連した火山泥流堆積物（早田1989・2004）に由来する可能性も否定できない。

以上のことから、W-7号溝跡の覆土基底部の土層の形成は5世紀以降と推定され、W-7号溝跡の年代は溝の埋積物の流失あるいは除去がない限り5世紀以降と推定される。さらに、分析対象試料では、本遺跡周辺に大量に降灰した1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、荒牧1968、新井1979）に由来するテフラ粒子が認められることから、W-7号溝跡の年代は1108（天仁元）年以前と考えられる。

一方、前橋城の堀の基盤の堆積物のうち、最下位の堅くしまった疊混じり砂質堆積物は、今回は断面を詳細に観察できなかったものの、岩相から前橋泥流堆積物（新井1967）と思われる。その上位の成層した黄灰色のテフラ層は、層位や層相などから、約1.9～2.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group、新井1962、早田1996、未公表）のうち、前橋泥流堆積物より上位のもの、あるいはその一部と考えられる。

その上位に濃集した白色の粗粒火山灰については、層位や岩相から、約1.8～1.9万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石（As-Sr、町田ほか1984、中沢ほか1984、早田未公表など）に由来する可能性が高い。本遺跡周辺では、利根川対岸の前橋市総社の露頭で確認されている（早田1990）。

その上位の変形を受けている白色軽石層は、層位や層相などから、浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1、約1.7万年前、中沢ほか1984、早田1996）および浅間大窪沢第2軽石（As-Ok2、約1.6万年前、中沢ほか1984、早田1996）からなる浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group）と考えられる。テフラの分布を考慮すると、前者の可

能性が高いと思われる。As-Sr や As-Ok Group の同定に関しては、さらに重鉱物組成分析や、火山ガラス・斜方輝石の屈折率測定などを実施して同定精度を高めると良い。

縞の基盤で認められたテフラ層のうち、最上位の白色軽石層は、セクション A-A' 南地点では薄いものの、側方に追跡すると縞跡断削南部で成層したテフラ層（層厚 23cm）となる。このテフラ層は、主体部の厚い白色軽石層と、上部の白色細粒火山灰と桃灰色粗粒火山灰からなる成層した火山灰層から構成され、層相から約 1.3 ~ 1.4 万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP、新井 1962、町田・新井 1992）に同定される。

第5節 まとめ

前橋城（三の丸門東地点）の調査区において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より前橋泥流堆積物、浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group、約 1.9 ~ 2.4 万年前）、浅間白糸軽石（As-Sr、約 1.8 ~ 1.9 万年前）、浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group、約 1.6 ~ 1.7 万年前）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP、約 1.3 ~ 1.4 万年前）、浅間 C 軽石（As-C、3 世紀後半）、古墳時代の榛名火山の噴火に由来するテフラなどを検出することができた。発掘調査で検出された W-7 号溝跡の層位は、少なくとも榛名有馬テフラ（Hr-AA、5 世紀）より上位で、As-B の下位と推定される。

註1：放射性炭素 (^{14}C) 年代。As-BP Group、As-Sr、As-Ok1、As-YP に関する ^{14}C 年代については、最近検討が行われている（関川ほか 2011）。現段階において、それらは間に約 1.9 ~ 2.9 万年前、約 2.1 ~ 2.4 万年前、約 2.4 万年前、約 1.7 万年前となるが、今後信頼度の高い ^{14}C 年代を収集して、実際の年代を明らかにする必要がある。

註2：厳密には As-YP とは間に時間隙隙を挟む別のテフラ層（MK-13）とする考えもある（たとえば辻ほか 2004）。

参考文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編 10, p1-79.
- 新井房夫（1967）前橋泥流の噴出年代と岩宿 I 文化期。地球科学 70, p46.
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の銅器時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル No.53, p41-52.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地図研専報第14, p1-45.
- 町田 洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス—日本列島とその周辺」。東京大学出版会, p276.
- 町田 洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺」。東京大学出版会, p336.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤那彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究に関するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p865-928.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤那彦（1984）浅間火山。黒巣～前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集 No.14, p69-70.
- 坂口一（1986）榛名二ヶ岳起源 FA・FP 層下の土器層と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p103-119.
- 坂口一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡 H22 の水田耕作地と周辺集落との関係一。群馬県埋蔵文化財 調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p17-22.
- 関口博幸・早田勉・下岡順直（2011）群馬の旧石器編年のための基礎的研究—関東地方北西部における石器群の出土層位。テフラ層序、数値年代の整理と検討一。群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要 29, p1-20.
- 早田勉（1989）6 世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究 27, p297-312.
- 早田勉（1990）群馬県の自然と風土。群馬県史編纂室編「群馬県史通史編 I」、原始古代 I, p35-129.
- 早田勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴一とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて一。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 7, p256-267.
- 早田勉（2004）火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史一とくに平安時代の噴火について一。かみつけの里博物館編「1108 - 浅間火山 - 中世への脈動」, p45-56.
- 辻誠一郎・宮地直道・新井房夫（2004）南軽井沢地域の浅間火山テフラ層序と編年—環境・災害史研究の基礎として一。国立歴史博物館 研究報告 16, p165-192.

第VII章　まとめ

本遺跡で検出された遺構は、堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、土坑11基、ピット176基、井戸跡2基、溝跡10条、再築前橋城三の丸外堀跡1条、道路状遺構1条、瓦だまり2ヶ所、性格不明遺構2基である。出土遺物は平安時代の須恵器・土師器と、近世の陶磁器・内耳土器・かわらけが主体である。

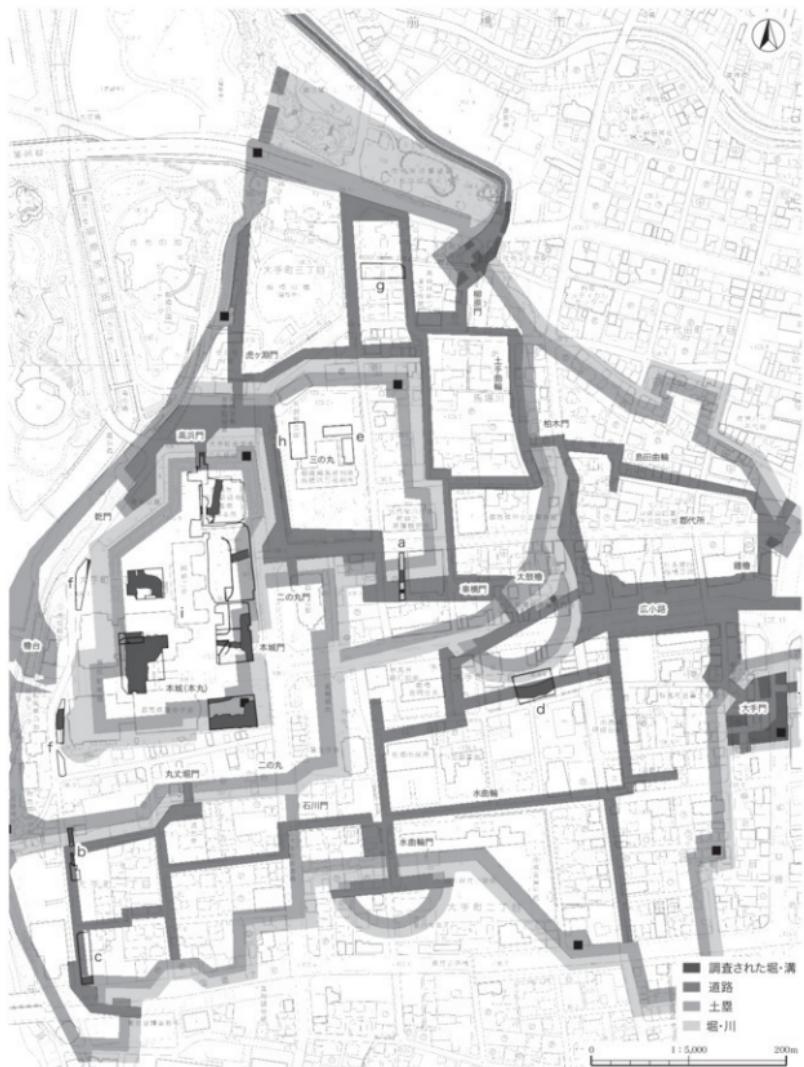
古代の遺構は、堅穴住居跡2軒、ピット1基、性格不明遺構1基が検出された。住居跡2軒の時期は、いずれも遺物から9世紀後半であると考えられる。時期が異なる他の遺構から9世紀後半から10世紀前半の所産と考えられる須恵器・土師器が多数出土していることから、当該期の遺構は他にも存在したが、近世に行われた整地によって削平された可能性がある。なかでも須恵器の稜腕と小型短頸壺、古瓦など古代の仏教関連の遺物が出土していることは注目される。中世に関しては遺物が少量出土しているものの、遺構は検出されていない。近世の遺構・遺物は、数量が多く本遺跡において主体となっている。再築前橋城三の丸外堀跡(W-11)は、三の丸側のみ石垣で構築されており、その築石・根石のうち2点(65・66)に文字、他に「△」の墨書きが確認された。他の遺構は堀跡(W-11)より時期が遅るものが多い。遺物の主体は18世紀代であり、17世紀以前や19世紀代のものも出土している。

近世城郭である前橋城は、時期ごとの絵図が多数描かれており、再築前橋城に関しては復元図が作成されている。以下、本調査区における遺構を復元図や絵図を用いて検討する。

第30図はこれまで実施された前橋城の調査区(a～i)と、再築前橋城復元図(前橋市教育委員会1996)を合成したものである。本調査区(a)で検出された再築前橋城三の丸外堀跡(W-11)は、復元図とはほぼ一致している。堀跡に平行して検出されたA-1号道路状遺構と、その北側の側溝であると考えられる石組みのW-10号溝跡は、堀跡と併存していたことが調査から判明しており、実際には堀跡と道路の間に空地があったと考えられる。

第31図は、第30図をもとに「前橋城再築計画圖」を現況図に合わせて作成したものである。「前橋城再築計画圖」は前橋城再築の際測量方宮澤廉五郎氏の手記に描かれていた図を前橋市立図書館5代目館長である佐藤綱太郎が模写した図であり、佐藤綱太郎が図中に記しているように当時荒廃していた前橋城をいかに利用して再築の計画が考えられていたかを知ることができると貴重な資料である。酒井氏・松平氏時代の前橋城の絵図(第32・33図及び藤巻・片野・巾・桜岡1999)と見比べてみると、近世城郭に改修された当初の地割が廃城後も概ね踏襲されていたことがわかる。本図からみると、A-1号道路状遺構は再築前橋城起工以前から既に存在した「十人小路」と呼ばれる道路であったことがわかる。車橋門から城内に続く道路である十人小路は、城再築後も道路として利用されており(第30図)、三の丸の外堀はこの小路に平行するように計画されていたのだろう。調査区北部は絵図でみると何もないが、長屋などは描かれていない可能性があるため、何らかの土地利用があつた可能性も否定できない。

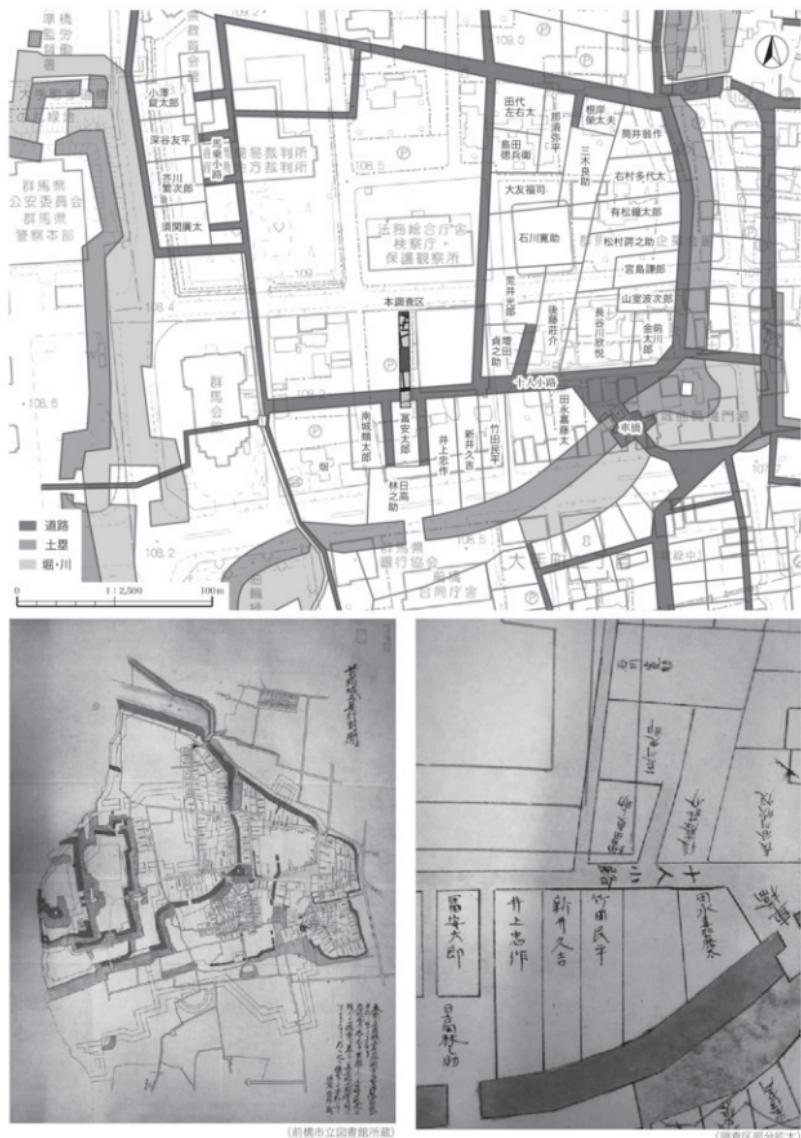
第32・33図は、第31図をもとに十人小路と車橋門を機軸として現況図と合わせて作成した。これらは「前橋城再築計画圖」のように測量方が作成した図ではないため第30・31図より現況図と齟齬があり、模写のため人名も実在の家臣名と照合する必要性はあるが、屋敷の配置をみる上では参考になる。第32・33図から、本調査区北部は、松平氏時代において「堀中左門」、酒井氏時代において「成瀬六左衛門」の屋敷地内であったことがわかる。北側の地塊は北西に傾いており、W-5号溝跡はその地塊を意識して掘削されたと考えられる。近世整地層(III層)は、包含されていた遺物の時期が概ね18世紀中葉以前であり、寛延二年(1749)松平氏が入封するにあたり城郭が相当改修されていることから、その時に整備された整地層である可能性がある。近世整地層を松平氏入封時の整地層と仮定した場合、III層より上面から掘り込まれた遺構は松平氏時代以降、III層に被覆さ



a : 2011 「前橋城（三の丸東地点）」市教委
 b : 2010 「前橋城（南曲輪地点No.2）」市教委
 c : 2009 「前橋城（南曲輪地点）」群理文
 d : 2008 「前橋城（車籠門・丸馬出造跡の調査）」市教委
 e : 2007 「前橋城三の丸遺跡」群理文

f : 2004 「前橋城遺跡」調査会
 g : 2002 「前橋城北曲輪遺跡」群理文
 h : 1996 「前橋城三ノ丸遺跡」前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会
 i : 1997-1999 「前橋城遺跡Ⅰ・Ⅱ」群理文

第30図 再築前橋城復元図と調査区



(前橋市立図書館所蔵)

「前橋城再築計画圖」は前橋市立図書館5代目館長である佐藤綱太郎（雅号：雲外）によって模写された図であり、図中に「本城は、前橋城再築の際、測量方宮澤庵五郎氏の手記におけるものなり 廉城九年、荒廃した時の状況と、残れる家（濠）、塁を基とする再築城の関係を明らかにするものなり 乃ち、之を模写して資料とす 佐藤雲外寫」と記載されている。

第31図 陣屋時代の前橋城絵図と本調査区



(前橋市立図書館蔵)

(調査区部分拡大)

本図は1767年に宝曆年間の前橋城を描いたとされ、図の状態から近代に模写されたと考えられる。

第32図 松平氏時代の前橋城絵図と本調査区



「前橋城圖」は宝暦年間に酒井氏時代の前橋城を描いたとされ、本図約250年前と記載されていることから大正末期から昭和初期に模写されたと考えられる。図中には「酒井氏の姫路に移封するに及び、松平大和守代わって、城主となる。寛延之末年より明和三年に至る間利根川しばしば氾濫して、城地崩壊したり、捨って武(州)之川越に移り治む」と漢文で記されている。

(調査区部分拡大)

第33図 酒井氏時代の前橋城絵図と本調査区

れていた遺構は酒井氏時代以前というこ
とになる。従ってB-1～3号掘立柱建
物跡は松平氏時代か陣屋時代の建物で
あると考えられ、B-4号掘立柱建物跡は
酒井氏時代に遡る可能性がある。また、
確認面・重複遺構・出土遺物からD-4
号土坑とW-5号溝跡は酒井氏時代のもの
である可能性が高い。

前橋城の再築については、前橋藩に
よって文久二年～慶応二年にわたって
作成された「御築城別記録」(阿久津 他
2003)に詳細な記録が残されており、
この史料に記載されている今回の調査区
と関連のある事柄について以下簡単に記
す。土居(土塁)・堀の築立は地方(農村部)
に任せられており、文久四年(1864)

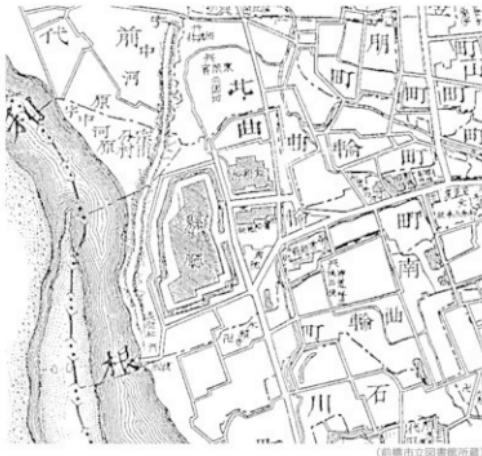
正月十二日から工事が着工されたことが
わかる。三の丸の土居は同年(元治に改
元)四月にはほぼ完成したが、元治元年(1864)八月八・九日、大雨によって堀と土居が部分的に破損し、三の丸への引越し予定が延期となっている。三の丸内の建物については文久三年(1863)九月廿五日から静寿斎の住居、翌年二月十六日から涼叢院の住居がそれぞれ着工されていたことが記されている。三の丸外堀跡(W-11)から出土した築石の墨書について史料をみると、66の「十一人口」については文久四年(1864)二月十七日条にある「人足 捨壱人」、65の「八月 卯ノ六 八人遣」については元治元年(1864)八月十一日条にある「大工棟梁 八人」が内容的に近似している。²¹史料内の記載と墨書が同内容を示しているかは判断できな
いが、両者ともに三の丸に関連する条のなかに記載されていたことは興味深い。「△」の記号は、近世城郭の石垣にみられる刻印(厚 2001、木越・滝川 他 2008)のような性格であると考えられる。再築前橋城は県庁として使用された本丸以外は明治初頭に取り壊されており、明治25年4月に発行された「前橋市街圖」(第34図)をみると調査区周辺の地割が大幅に変化していることがわかる。ただし、A-1号道路状遺構は、側溝であるW-10号溝跡の1層から型紙絵付の磁器破片が出土していることから明治15年以降まで利用されていた可能性
があるだろう。

今回の調査では、狭い調査区のなかに重複して多数の遺構が検出された。城址という遺跡の属性上、絵図や史料に恵まれ、短期間の調査であったが豊富な成果を得られたと思う。前橋城域で過去実施された発掘調査を時期別に合わせて検討し、今後積み重ねしていくであろう発掘調査成果を含めて、継続的に文献や絵図との照合を行ない、さらなる前橋城の解明が進むことを期待する。最後に、今回の発掘調査及び整理作業にあたり、多大な助言をくださった阿久津宗二氏に記して感謝を申し上げます。

註1：阿久津宗二氏のご教授による。

註2：群馬県では、高崎市の羅漢町遺跡(坂口・植崎・秋山2011)で出土した22号本棺墓に性格不明な「△」の記号が記載されている例がある。

註3：第34図は前橋地方裁判所の新庁舎が既に描かれている。前橋地方裁判所は、発足当初県庁構内にあり明治25年5月に新築された



「前橋市街圖」焼乎堂 高橋常蔵 発行 明治25年4月11日印刷

第34図 明治25年の調査区周辺の市街図

引用・参考文献

【前橋城関連】

- 前橋市教育委員会 1996 『関東の華・前橋城』前橋市観光協会
- 荒井英輔 1998 『前橋城三ノ丸遺跡』前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会
- 井川達雄・片野建介 1997 『前橋城遺跡I』第1分冊 群馬県教育委員会
- 藤巻幸男・片野雄二・巾隆之・板岡正信 1999 『前橋城遺跡II』第2分冊 群馬県教育委員会
- 松原孝志 2002 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第299集『前橋城北曲輪道路』財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 亨・小鶴 真 2005 『前橋城』前橋市埋蔵文化財発掘調査会
- 石守 晃 2007 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第424集『前橋城三の丸遺跡』財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 梅澤克典・笠原仁史 2008 『前橋城・車橋門丸馬出遺構の調査』前橋市教育委員会
- 神宮 駿・高階敏昭 2009 『前橋城(南曲輪地点)』前橋市埋蔵文化財発掘調査会
- 神宮 駿・山崎芳春 2010 『前橋城(南曲輪地点No.2)』前橋市教育委員会
- 阿久津律二 2003 『御築城別記録』『前橋藩松平家記録』第28巻 前橋市立図書館
- 阿久津律二 他 2007 『前橋藩松平家記録』第40巻 前橋市立図書館
- 阿久津律二 2004 『前橋藩 松平直克夫人 幸』『歴史読本』第49巻 第10号 新人物往来社
- 【前橋市史】
- 前橋市史編さん委員会 1971 『前橋市史』第一巻 前橋市
- 前橋市史編さん委員会 1973 『前橋市史』第二巻 前橋市
- 前橋市史編さん委員会 1975 『前橋市史』第三巻 前橋市
- 前橋市史編さん委員会 1978 『前橋市史』第四巻 前橋市
- 【周辺の遺跡】
- 矢島博文・新原洋一 2001 『石倉下宅地遺跡 紅葉村東遺跡』表町石倉線遺跡調査会
- 小鶴 真・前田和明 2006 『文京町No.1遺跡』前橋市教育委員会
- 坂口一・瀧川伸男・高井弘佐・鈴木裕明 2007 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第407集
『總社開皇明神北IV遺跡・元總社牛池遺跡・元總社北川遺跡・元總社小見内V遺跡』財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 阿久津真一・清水亮介・神宮 駿・小田哲生・池田史人・篇賀綾子 2009 『元總社蒼海遺跡群(20)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 【その他】
- 秋本太郎 2005 「上野と周辺地域との関係—在土地器の分布論から探る—」
- 「海なき国々のモノとヒトの動き—16～17世紀における内陸部の流通—」内陸遺跡研究会
- 秋本太郎 2008 「戦国期北関東のかわかけ—戦国大名支配との関連—」『中世東国の世界3 戦国大名北条氏』高志書院
- 厚秀雄 2001 「第5章 江戸城外縁跡(御橋付近石垣の調査)」千代田区文化財調査報告書12
『江戸城の考古学—江戸城跡・江戸城外縁跡の発掘報告書』千代田区教育委員会
- 荒川隆史・加藤 学 1999 新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書V『柏原A遺跡』
- 新潟県教育委員会・財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 出浦 崇・永井智教 2000 『群馬県』古代仏教系遺物集成・関東一考古学の新たな開拓をめざして』考古学資料から古代を考える会事務局
- 木越隆三・瀧川重徳 他 2008 金沢城史料叢書『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書1』石川県金沢城調査研究所
- 木津博明 1989 「上野国に於ける在地生産土器に就いて—上野国分僧寺・尼寺中間地域を中心にして—」『中近世土器の基礎研究V』
- 日本中世土器研究会
- 坂口一・柄崎修一郎・秋山正典 2011 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第512集『羅漢町遺跡』
- 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992 シンポジウム『江戸出土陶磁器・土器の諸問題I』発表要旨 資料集
- 江戸陶磁土器研究グループ 1996 シンポジウム『江戸出土陶磁器・土器の諸問題II』発表要旨 資料集
- 群馬県教育委員会 1988 『群馬県の中世城館跡』
- 豊島区遺跡調査会 1998 『陶磁器・土器分類・計測基準』『伝中・上富士前II』別冊 豊島区教育委員会

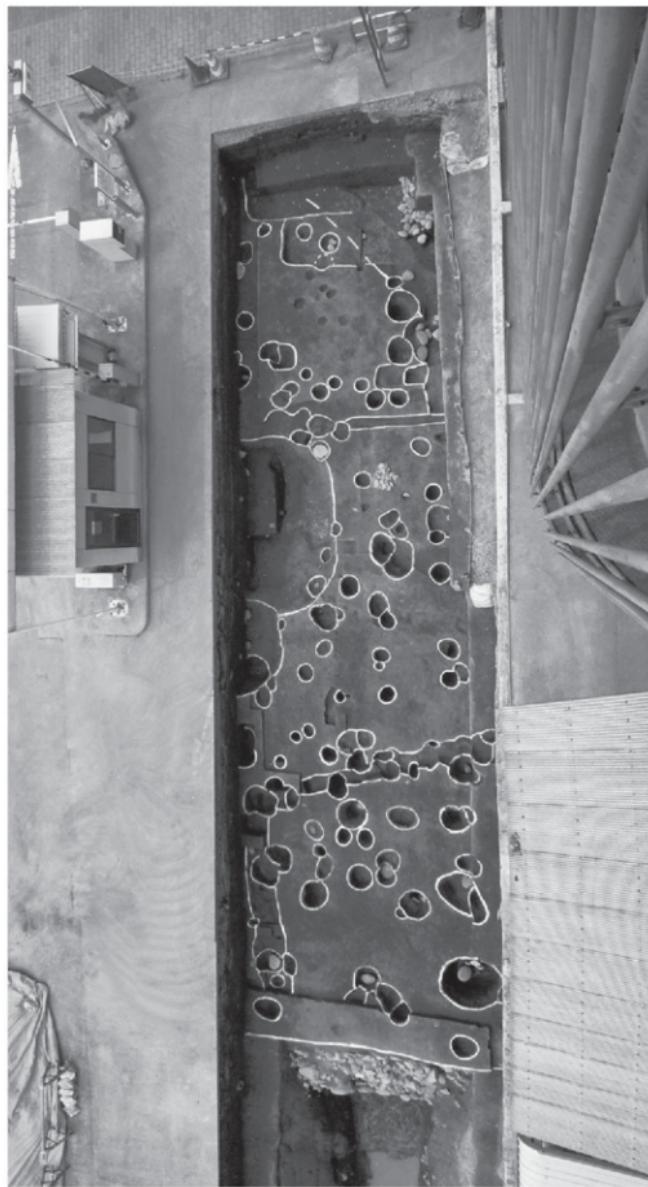
写 真 図 版



調査区 遠景 南西から



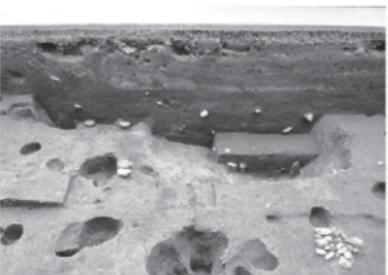
調査区 全景 南から



調査区北部 全景 上が北



H-1・2号住居跡 床面 全景 南から



D-1～4号土坑 全景 東から



P-12号ピット 全景 西から



P-193号ピット セクションA 東から



I-2号井戸跡 断ち割り 南から



W-1・2号溝跡 全景 南から



W-10号溝跡 全景 東から



W-10号溝跡 断ち割り 東から



W-11号堀跡 全景 北西から



W-11号堀跡 石垣 南東から



W-11号堀跡 石垣 南から



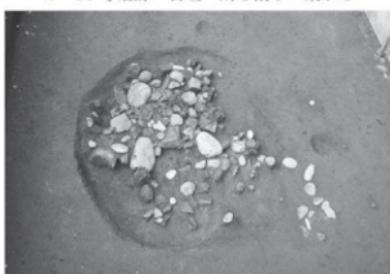
根石 (66) 出土状況 南から



W-11号堀跡 石垣 断ち割り 東から



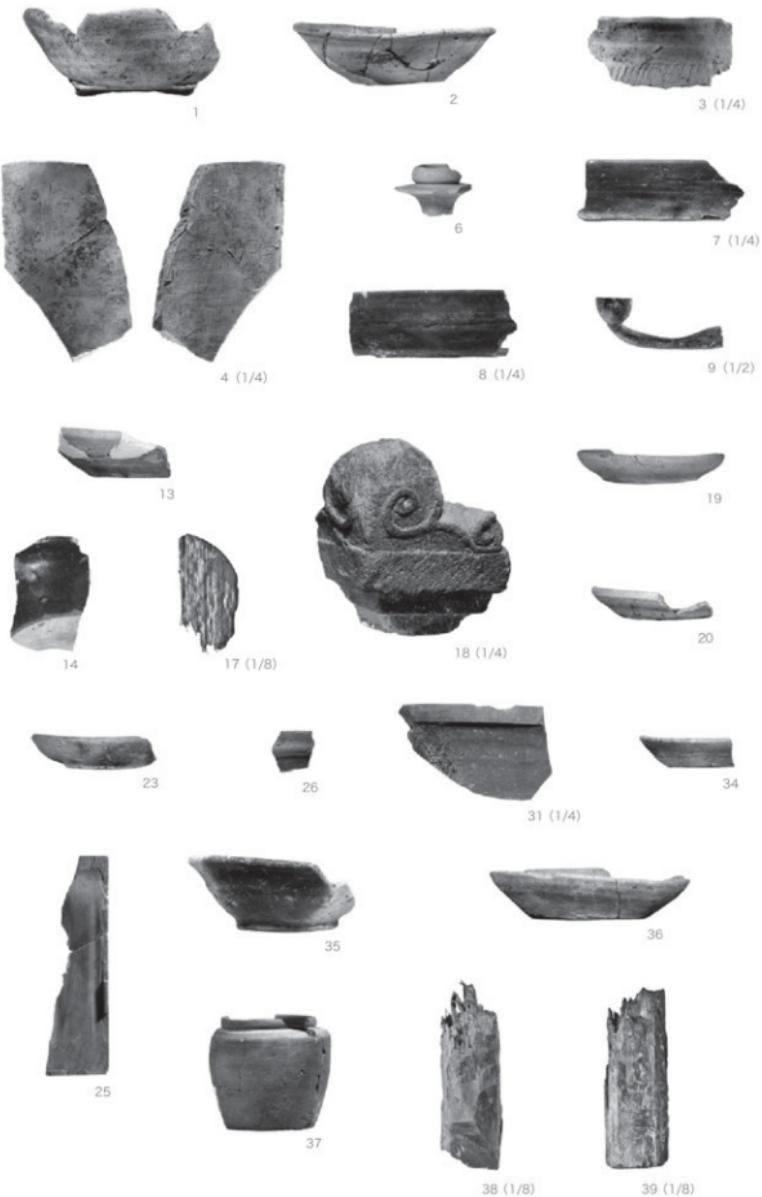
W-11号堀跡 調査風景 北から



X-1号瓦だまり 遺物出土状況 南から



X-4号性格不明遺構 全景 北から



出土遺物（1）



40 (1/8)



43 (1/2)



44



41 (1/8)



49 (1/4)



51 (1/8)



52



57 (1/4)



58 (1/2)



59



60 (1/2)



61 (1/8)



63



64



62 (1/8)



出土遺物 (3)

報 告 書 抄 錄

フリガナ	マエバシヨウ サンノマルモンヒガシチテン
書名	前橋城（三の丸門東地点）
副書名	旧中央公民館解体工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	一
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	福田賀之 小林朋恵
編集機関	前橋市教育委員会
所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三保町二丁目 10-2 TEL 027-231-9531
発行年月日	2011年11月30日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード	日本測地系		世界測地系		調査 期間	調査 面積	調査 原因	
			市町村	遺跡	北緯	東経				
マエバシヨウ 前橋城 サンノマルモンヒガシチテン (三の丸門東地点)	群馬県前橋市大手町 2丁目3番 1・17・18・20	10201	23 H54	36° 23° 17°	139° 04° 00°	36° 23° 29°	139° 03° 48°	2011.5.11 ~ 2011.6.20	248m ²	旧中央公民館 解体工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	要約		
前橋城 (三の丸門東地点)	集落 城址	平安時代 以前	堅穴住居跡	2軒	灰釉陶器	33点	平安時代の堅穴住居跡が2軒検出された。
			ビット	1基	須恵器	175点	平安時代の土器は、近世の遺構からも一定量出土している。なかでも須恵器の棱鏡や小型短頸壺、古瓦など仏教関連の遺物が出土していることが注目される。このほか、少数ではあるが埴輪・石器が出土している。
			性格不明遺構	1基	内面黒色土器	1点	再築前橋城三の丸外堀跡が東西方向に調査区を横断して検出された。この堀跡の南側に平行して道路状遺構とその北側の埋溝である石組みの溝跡が検出された。縁石から道路状遺構は酒井氏時代から存在する「十人小路」と呼ばれる道路であることが明確した。このほか再築前橋城以前に構築された掘立柱建物跡や井戸のほか、多数のビットが検出された。
			土器		土器	307点	
			土器		古瓦	17点	
			土器		鉄津	3点	
			土器		埴輪	3点	
			土器		石器	5点	
		中世	土器		陶器	16点	
		近世	掘立柱建物跡	4棟	磁器	408点	
			土坑	11基	陶器	474点	
			ビット	106基	近世土器	243点	
			井戸跡	2基	近世瓦	416点	
			溝跡	10条	漆器	4点	
			堀跡	1条	木製品	5点	
			道路遺構	1条	木材	34点	
			瓦だまり	2ヶ所	金属製品	7点	
			性格不明遺構	1基	土製品	2点	
					石製品	6点	
					錢貨	2点	
					動物遺体	13点	
	不明	ビット	69基				

前橋城（三の丸門東地点）
旧中央公民館解体工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷 平成 23年 11月 20日
発行 平成 23年 11月 30日

発行 前橋市教育委員会
群馬県前橋市三保町2-10-2
電話 027-231-9531

印刷 網谷印刷有限会社
群馬県伊勢崎市今泉町2-939-5
電話 0270-25-0193